
とあるネギのシスコン日記的ななにか？

アリストリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるネギのシステム日記的ななにか？

【Zコード】

Z71010

【作者名】 アリストリア

【あらすじ】

もしもネギに妹が一人いたら……もしもネギがシステムだつたら
という設定で、日夜妹達を愛し続けるため頑張るネギ。

「あ、妹達よ、僕の胸に飛び込んでおいで！」
ネギよ頑張れ！

システムじゃない（前書き）

息抜きです。

シスコンじゃない

突然だが、僕はシスコンではない。

もう一度言ひけど、シスコンではない。

ただただ、僕は可愛い妹を愛でているだけなのだ。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ リーゼ・スプリングフィールド！」

腰まで届きそうな銀髪に田つきがちょっと怖いですけども可愛い妹が卒業生代表です。

ちょっと生意気な所がありますけども、そこが可愛いのです。

「次、アミ・スプリングフィールド！」

リーゼの後に呼ばれたのはアミとこう妹です。

髪の毛は肩までかかるぐらいの茶髪で、田はくつとした可愛い妹です。

自分の気持ちに素直で可愛いと言えるでしょう。

「ネ」

ああ、僕は卒業生代表なんかじゃなく落ちこぼれですね。どうやら魔法の才能などは妹達に受け継がれているようですね。まあ、僕としては妹達が無事に育ってくれたらそれでいいのです

けどね。

「 ギ 」

しかしながら可愛い妹達だと思います。

日本には、天は二物を与えるという言葉があるらしいですが、どうも僕の妹達には、天は三物も四物も与えているようです。

容姿端麗で頭脳明晰という僕の妹達、はつきり言って少し羨ましいと思つたりもしますが、妹達ならば仕方がないと割り切るほかありません。

だけでも僕は運動神経とかなどは意外と良かつたりしますよ。例えば頑丈さとか。

「 ちょ 」

なにやら外野が煩いですが別にどうでもいいことです。

しかしながら妹達に比べて僕は容姿端麗とは言えません。

あの雪の日の事件で僕は少しカツコ悪くなっちゃいましてね、顔に少々ですが火傷がありましてね、嫌なものです。

まあ、妹達を庇つてできたものですが、妹達の綺麗な顔に傷がつかなかつたのは嬉しいものですね。

「 ネギ 」

ついでに言うと、妹達は火傷の事は知らないのです。

普段は魔法で火傷の部分を隠しているのですよ。

「 火よ灯れ^{アーリーデスカット} 」の後に幻術系の魔法を覚えたのです。一日で覚えた僕を褒めてあげたいですね。

まあ、変身魔法とでも言つてください。

「いい加減に　」

火傷は妹達を庇つてできたものですが、しかしながら、妹達の父親への執念は凄いです。

軽く引けるほど凄い執念ですが、とりあえず、僕は父親を探し出し妹達にあわせてやりたいと思っているわけなのですがね。まあ、僕としても父親に会つて、軽く頬に108発ほどぶん殴つてやりたいのですよ、あと、僕は妹達を愛しているのです。

「置いていき　」

しかし悲しいことに妹達は僕を嫌つているようなのです。僕が落ちこぼれだからなのでしょうか、妹達は僕の事を避けているのです。

ネカネ姉さんも雪の日の事件以来、僕を避けています。火傷の事を自分のせいだと思い込んでいるのでしょうか？

今のところアーニャが普通に接してくれていますが、いつ避けられるか判らないので怖いものです。

あ、ここの中学校の校長とか日本にいるタカミチもちゃんと接してくれていますよ。

「だけど　」

それと一つだけ思うことがあります。

父親は英雄です。

皆は父親が英雄だからと言つて過剰な期待をして勝手に幻滅するのは止めてほしい。

最初は皆が僕に期待していたらしいのですが、魔法の才能が皆無である事が判ると……温度差が激しいって悲しいですね。

まあ、そんな人達を見ていますから、意外と達観、というよりも

精神年齢が高くなつてこるかもしません。

「いい加減にしなさああああああああーーー。」

「せつときからなんですか？ 僕は少し考え方をしてこらのですが？」

「せつときから……戻づいていたなら返事ぐりこしなれことー。」

「リのツインテールをしている彼女はアーニャです。
リの子はシンシンしていますけども、実はドレると可愛いくのです。

「まあまあ、それで、卒業式は終わったの？」

「終わったわよ、私達以外いないわよ

「ナツリですか、やつぱり姉さんと妹達は……」

「先に行つたわよ……ハイ、これ、あなたの代わりに私が受け取つ
たから」

少し悲しそうな表情で言つドーカーニャに感謝の言葉があふれ出で
ます。

しかしながら、ありがとうござりますむち言つたいものですが、い
かんせん、僕はツインテレ属性持ちなので素直にありがとうと言えま
せん。

「べ、別にお礼つて訳じやないけど、その、ありがとうと言つた
いわけじゃないんだからねー！」

そう言いながらアーニャの頭を撫でてあげます。

アーニャは少し僕よりでかいので、つま先で立つて撫でてあげるのです。

「なななな、別に撫でられて嬉しいわけじゃないし、あなたのために受け取ったわけじゃないんだから、ネカネさんが恥をかくと思って、それでしただけなんだから！」

ツンデレをツンデレで返すとは恐ろしい子です。

しかしながら、そんなツンデレあんたにはないでしょ！ そういうコソでほしかったのですが仕方ない。

「アーニャをからかうのは楽しい、といつ訳で行きましょうか！」

「……死ね！」

アーニャがワナワナと拳を震わせながら襲いかかってきますが、僕は避けて学園の廊下に逃げます。

すると、後ろから恐ろしい声で、まてえええええ！ と聞こえたりしたので、アーニャが落ち着くまで鬼ごっこが続きそうです。

「我ながら自分の頑丈さにお礼を言いたいものですね

「ネギは頑丈すぎよ…… 手が痛いわ」

あの後、アーニャに追いつかれボコられましたが、僕の頑丈さが命を救ってくれました。

「」のよつなやり取りは珍しくもなく、魔法学園に入学して以来、「」のやり取りをしています。

「あ……」

声が聞こえたので後ろを振り向いたら、姉と妹達がいました。なんというか空気が微妙になりましたが、僕としては避けられるのは悲しいので仲直りをしたいです。できるだけ明るい声を出そうと努力をしてみました。

「卒業おめでとうー、妹達よ、何処に行くか決まったのかい？」

明るい感じで言つたつもりでしたが、どうも無反応なのでびっくりと考へてしまします。

隣のアーニャを見ると、少し苛立つている感じがするのは氣のせいでしょうか？

「その、ネギも卒業おめでとう、えっと、何処に修行しここへのか見た？」

「いや、見てませんよ、今から見てみようかと思つまわ」

手元にある手紙みたいなものを開けます。

中からは白紙の紙が出てきましたが、すぐに文字が浮かんできました。

「えつと、日本で……ふむ、これは嬉しいですが……流石に堪えますね」

アーニャはなんて書いてあつたのか気になるようで、僕が持つて
いる紙を覗き込みました。

「なにに、日本で……ローザとトマの補佐をする」と

その言葉に姉と妹達は驚いたよつすでしたが、僕はなんとも言え
ません。

実の妹達の下で学べ、そつ言いたいのでしょうか？ プライドと
言つものがありますけども、悲しいものですね。

「トマとローザの補佐って事は……ローザ達も日本に？」

「くんと妹達は頷きました。

姉さんは少しなんと言えば良いのか判らない顔をしています。

「ネギ……その、頑張ってね？」

火傷をしている所を優しく撫でてくれました。

幻術的な魔法を使つてるので判りませんが、どうやらじつよ
り、やつぱり気にしてくるようです。

「頑張りますよ、それよりも、気持ちよいです、修行の地から帰つ
てきたら撫でてくださいね」

嬉しい気持ちで胸がいっぱいになりました。

姉さんは嬉しそうに微笑みながら首を立てに振っています。

しかしながら姉さんと仲直りはできましたが、妹達とは無理そう
です。

露骨に嫌な顔をしてこますからね。どうしたらいいのでしょうか。

だが、そんな顔をしている妹達も……良い。

悩んでもしようがないので、家に帰つて卒業祝いでもしようと思
います。

「それじゃあ、姉さん、家に帰つて卒業祝いでも……」

「自分で卒業祝いって……まあ、それには賛成ね、卒業祝いをしま
しょう」

僕の言葉に賛同してくれるアーニャには後でクーデレ的な反応の
お返しするとしましょう。

とりあえず、明日から大変かもしれません

ネギ・スプリングフィールドの日記へより

シスコンじゃない（後書き）

作者「ではでは、俺はこの辺で」

ネギ「待ちなさい、貴方はやつてはいけないことをしました。そういう訳でブローケンファンタズム的な意味で葬り去ろうと思います」

作者「なんでイキナリ！ どうしてだ！」

ネギ「他の小説はどうしましたか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えて……なんて言えばいいんだっけ？ とりあえず死んでください、後、感想など待ってます」

作者「え、だれかあああああああ……アツ————！」

さて……弟子入りしました。（前書き）

息抜き最高＆意外との書き方は書きやすかった……他のも頑張ろ
う。

さて……弟子入りしました。

「はてさて、此処が日本の麻帆良学園ですか」

どうもネギ・スプリングフィールドです。
今日日本の麻帆良学園といふところに居ます。
僕が今何をしているのかと訊つとですね。

「……此処は何処でしょ？」「

迷子になっちゃいました。

なんか駄つぽいところなんですけどね、少し歩いていたら全然判
らない場所にいます。

何かでかい建物が見えます、たぶん麻帆良学園の校舎だと思つ
ですが……いかんせん、知識が無いので勝手に入つていいものな
か悩むところです。

それと妹達は既に麻帆良学園で教師をしていて、
ちょっと遅めの修行地です。

何故遅めに来たのかと言いますと……日本語つて難しいよね！
という訳でどうしましようかね。校長が訊つには妹達が迎えに来
てるらしいのですが……。

適当に歩いてしまったので、迎えが来ないと判断できます。

「久しぶりだな、ネギ兄様」

迎えが来ないと判断したとたんきました。

しかしながら久しぶりに妹の声を聞いたような感じがします。
職員の服装がとても似合つてて鼻血が出そうでした。

「リーゼ！ それにアミも！ 久しぶりですね！ ここにちわ！」

僕は明るく嬉しいそうな声で妹達に挨拶をしましたが嫌そうな顔をしてました。

少し傷つきましたが可愛いので許します。

「ええそうですね、久しぶりですね、兄さん、それじゃ着いてきてください、いらっしゃす」

そう言つてリーゼは学園に向かって行きます。

どうやら僕とはあんまり話したくないようです。

アミもリーゼも昔は寂しがりやだったのに、悲しいことです。昔ならば僕が寝ていた布団で、兄さん、兄様、と呼んで僕のパジヤマを離さなかつたのに。

これははとてもとても悲しいことですね。

「ネギ兄様、なにをほんやりしている？ 早く着いてくれ、私はネギ兄様みたいに遊びほうけているほど暇ではないんでな」

そう言つとアミも学園に入つていきました。

これは酷い。

なんというか酷いです。

僕は確かに暇人ですが、僕は遊んでなんかいません。

僕はちゃんと仕事をしていますよ、例えばアミとリーゼを盗撮したりとか。

「待つてください、置いていかないでください

とりあえず僕は妹達を追いました。

「入ってきなやー」

「では学園長、失礼します」

ドアをノックしてリーゼ達が学園長室と思われる部屋に入つてきました。

僕もその後に着いていきます。
そして僕は吃驚しましたよ。

まさかの驚愕吃驚です。

「未確認生物だと、そんなバ……いえ、なんでもありません」

少し心の声が出てしまいました。凄く怖い顔で睨まれました。

だがそれがいい。その睨みがいい！
少し変態的になつてしましましたね、ごめんなさい。

「ほつほつほ、ワシが此処の学園の学園長、近衛近右衛門じや、遠路はるばる良く来たのおネギ君。歓迎しよう」

顎鬚を触りながら言ひ学園長に少しだけ好感を持ちました。

なんとなくですが同じ、いや何か共感できるなにかを持っている
ような感じがしました。

「私達はこれで、行こうマ！」

「やつですね、リーゼ、早く行きましょ！」

失礼しました。そう言って妹達は出て行きました。

なんともまあ、僕と一緒に居たくないのは判りますが、兄としては悲しいです。

これは一度、何故嫌われているのか考えるべきなのでしょうか？

「……随分と嫌われてるみたいじゃの？」

「いえ、慣れますので、それで、僕はいつたいこの地で何をすればいいのでしょうか？ リーゼとアリの補佐と書かれていましたが……？」

少し学園長は難しい顔をしました。
なんとか話しくそつな顔です。

「ネギ君……ネギ君には此処の学園広域指導員になつてほしいのじ
や」

「学園広域指導員？ どんなことですか？ 説明を要求します」

学園広域指導員といつ葉に僕はなにがなんだか判らなくなりました。

とりあえず、学園広域指導員といつのは少し嫌な感じがします。妹達に余り会えなくなる意味で。

「ふむ、喧嘩の仲裁など犯罪行為などの取締りをしたりするのが表向きじや、裏は……」

「自警団みたいなものですね、判ります……で、本気ですか？ これでも僕は數えで10歳程度ですよ？」

「本気じや、あちらの学園長からは話を聞いておる。魔法はからつきしじやが、身体能力がズバ抜けて高いと」

「……やっぱ抜けて高いとは褒めてくれてるのは嬉しいですが、魔法がか
らつきとは酷い。

「これでも僕は魔法を結構覚えてますよ！ 初級ですがね……。

「……別にいいんですけど、妹達に危ない真似をさせないでください
よ？ 僕の大切な妹達なんですから……」

「いいぞい、危ない真似は極力させないようにしてしよう

「うむ、少しだけ信用がならないけど、まあ大丈夫だろ？」

「では、学園長、最後に1つ質問があります」

「なにかね、ネギ君」

「僕は何処で寝ればよろしいのですか？」

重大な問題だ。

何処に住み何処で寝ればいいのか全然聞いていないのです。
もしあここで考えてなかつた。なんて言葉が出たらブツツンする
かもしれません。

まあ多分大丈夫だと思いますが。

「ふむ、男子寮と女子寮が満タンでな」

「はい、それで？」

少し拳に力を入れてみましょ。

握った拳を学園長に繰り出す準備はOKになりました。

「……話は変わるが、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは
知つておるかの？」

「唐突ですね、一応知つてはいますよ。600万ドルの賞金首。そ

れがどうかしましたか?」

「つむ、実はな、エヴァンジエリン・A・K・マクダウエルは」の学園におけるんじやよ、しかも、リーゼちゃんヒルちゃんのクラスにのお」

一瞬この学園長が何を言つてゐるのか判りませんでした。

とりあえず学園長に近寄り机の前で止まります。

そして、Iの怒りで震える鉄拳をなんとか抑えながら問います。

「それで、学園長、なにが言いたいのですか？」

「そんなに怒るでない、そのヒガーンジエリン・A・K・マクダウエルは今や大人しくしてある。リーゼちゃんとアミちゃんには一切危害は加えんよ」

それを聞いて安心……なんてできるはずがありません。ですが、もしも僕の予想が正しければ。

「そうですか……それで？」

「だからのお、エヴァンジエリン……エヴァはログハウスに住んでおつてな、そこで泊まらせてもらつたらどうなのかと」

やつぱりでしたか。

学園長がエヴァンジエリン・A・K・マクダウエルは今や大人しくしてあると言つていた辺りで、なんとなく予想はできました。しかし、これは好都合かもしません。

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルにもしも運良く師事できれば……これはチャンスだ。

「良いですよ、では、エヴァンジエル・A・K・マクダウェルを呼んでください。というより、呼べ」

「これこれ、そつ急ぐでない、それに、Hガアなら既にそこにはいるやつだ？」

学園長が僕の後ろ……ドアを指差しました。
そこには金髪の美しい少女がいたのでした。
その少女からは凄まじい何かを放つてきました。
俗に言つ殺氣といつものでしょうかね？

「……なるほど、見た目で判断しては駄目ですね」

「これこれ、Hガアよ、少しほ殺氣を抑えんか、老体には堪えるぞ
い」

「ふん、そこの坊やはなかなかどうして肝が据わっているな……で、
くそジジイ、なに勝手に話を決めているんだ？」

だんだんと「チラに向かってきます。
その少女の背が大きい感じがしました。雰囲気的にですが。
多分姿勢的な何かででかく見えるのでしょうか。

「Hガアよ、落ち着かぬか、とりあえず、ネギ君を止めてやつては
くれぬか？」

「私がナギの息子を泊まらせると思つか？ バカだなジジイ、少し
は考えて言え」

だんだんと話が進んでいつてますが、とりあえず僕は無言を貫きます。

話をするタイミングを見計らおうと黙ります。

「しかしのよ、他に泊める所がないのじゃ、そこを我慢してくれん
かの？」

「嫌だな……いや少し待て……」それは……ふむ……

なにやらエヴァンジエリン・A・K・マクダウエルは考へている感じです。

なにか嫌な感じがしてなりません、背がなんか寒いです。これは一種の寒氣と言つものですか？

「ふむ、条件がある」

「条件とな? なんじやそれは?」

「それは……坊や耳を貸してみろ」

ふむ、耳を貸せと言われました。

しかしですねエヴァンジエリン・A・K・マクダウエル。

「耳は貸せません、何故なら取り外しができないから
「ボケんでいいから、さつそとこっちに耳を寄せろ!」

なんか凄く傷ついたんですが、これでも少し眞面目に言つたつもりなんですが……。

でも、とりあえず耳をエヴァンジエリン・A・K・マクダウエルの口元に寄せます。

「条件と言つのはだな……私に血を定期的に提供しろ」

「……なるほど」

血を提供しろとの事です。

少し学園長が聞きたそうにしていますが、確かに言つていい事です。

まあ、学園長の前で言つとめんじゃねーから、という感じが凄くエヴァンジエリン・A・K・マクダウエルからしますがね。

「……どれくらい?」「

「死ぬ一歩手前……と言いたいが、そこは私の気分しだいとこり」とだ

「なるほど……良いですが「チャラも条件と言つよつお願いがありま
す」

「お願いだと? なんだ少しぐらいなら聞いてやる」

そういうヒューバンジョン・A・K・マクダウホールが僕の口元に耳を持つきました。

うん、髪の毛から凄く良い匂いがします。

「リーゼとアミには手を出さなごでください」

「……シスコンか?」

「違います、ただただ愛してござるだけなのです

「……このシスコンめ

と言つて離れました。

多分ですが了承してくれたと思います。

何故ならエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの顔が少しだけ微笑んでいたのですから。

ですが、その微笑が凄く怖いのは氣のせいでしょうか?

ああ、姉さんと妹達よ、僕に勇気をください。

「ジジイ、交渉が成立したぞ、良かつたな? リーゼとアミには私は早退したと言つておいてくれ、行くぞ坊や」

「あ、ハイ! 学園長、失礼しました! 待つてくださいよー。H
ヴァンジエリン・A・K・マクダウェルー!」

学園長室から出ました。

とりあえずHガトーンジHリン・A・K・マクダウHルの後ろに立つ
いていきます。

ところよしHガトーンジHリン・A・K・マクダウHルとこちこち
呼ぶのはめんどいなので、Hガトちゃんと呼ぶことにしました。

「Hガトちゃんああん？」

「……縊り殺すぞ？」

「どうやら戻に入らなかつたようです。

ふむ、気は乗つませんがHガトーンジHリンさんで手を打ちましょ
う。

「では、HガトーンジHリンさん」

「なんだ坊や？ 母ちゃんのオッパイが恋しいのか？」

む、母ちゃんなんて知りません！

ですが妹達のオバ……なんでもありますとも。

「全然違います、とりあえず、何処に向かっているんですか？」

「ログハウスだ。黙つて着いて来い」

と言つて黙つて着いて行きます。

そして、いろいろすつ飛ばしてログハウスに着きました。

まあ感想はなかなかどうしていいものだ。ですかね？

「ふむ、どうだ、感想は？」

「なかなかどうして……人形がいっぱい、エヴァンジエリンさんの趣味が分かります」

「勝手に人の部屋を覗くな！」

ふむ、いろいろと勝手に見てしましたが、しかし良いものです。

木で覆われているので安心します。色々な意味で。

「そうね、エヴァンジエリンさんって、なんで学園にいるんですか？」

「ん？ それは、お前の父親である、ナギ・スプリングフィールドのせいだ！」

どうやら優雅に紅茶を飲もうとしていたエヴァンジエリンさんでしたが、どうやら僕は地雷を踏んでしまったようです。

エヴァンジエリンさんの話は長いですが、とりあえず、略すと、ナギ・スプリングフィールドに呪いをかけられ現在に到ると。なんともまあ、変な所に呪いをかけてくれた父親ですこと。

「ハアハア……分かつたか坊や？」

「ハイ、分かりましたが一つ訂正させてください」

「訂正？」

「公式の記録では死んでますが、父親は生きていますよ？」

とりあえず6年前の事を語りました。

ああ、あの時の僕は黒歴史中の黒歴史ですね。

なんと言つたか、今の妹達以上に父親を想つてましたねえ。

それに、なんか話してるときに、妹達に嫌われてしまつた原因、ぽいものを思い出しました。

まあ、それはまたいつか……ですかね？

「フ……フフフ……アハハハハハハハハ！ 殺しても死なぬよう
なやつだと思っていたが、まさか生きているとはな！ 良い情報を
貰つたぞ！」

「で、ですね、エヴァンジエリンさん、父さんを……ナギ・スプリ
ングフィールドを殴りたいと思いませんか？ 僕は非常に殴りたい
です、108発ほど殴つて妹達の前に出てもらい、父親面してもら
いたいです」

「フフ……それで？ なにかなシスコン君？」

「まあ、情報料、いや、勝手に僕が言い出したんですが、その、僕
を鍛えてくれませんか？ 108発も殴るに辺りスタミナなどが心
配なので……よろしいかな？」

つてな訳で僕は話します。

なんかエヴァンジエリンさんは爆笑しながら良いぞ言つてくれま
した。ですが、少しだけ血液が減る量が増えるみたいです。

ネギ・スプリングフィールドの日記2より

さて……弟子入りしました。（後書き）

作者「他の小説を書かず、なんか新しく始めてしました」
ネギ「+ - で平等です……とりあえず他のやつも書いてください」
作者「いや、他のやつも書いているんだが……ちょっと難しいよね
！」
ネギ「とつあえず、感想など待ってます」

リーダーシップが心配です（前書き）

息抜き

リーゼニアミが心配です

はてさて、昨日僕はとても大変でした。

いえ、本当に大変でした。

裏の人達に会つたりとかしましたし、 Gandalf先生には何故か気に入られたり、

なにが大変だったのか、それはEvangelionさんの入浴シーンの盗撮……ゲフンゲフン。

Evangelionさんのおつと、口が滑りかけてしまいましてね。

けど、僕に言えることは一つだけです。

オッパイは神が与えた芸術品ということを…

「でだ、坊や……ハツキリ言つてだな、貴様に魔法の才能は一片たりもありはせん！」

「こきなりど真中のストレートを投げてくれますね。そこは嘘でも才能があると言つてくださいよ」

「無いものは無い」

とまあ、今僕は別荘？ なんか時間が違う所にいます。

あれですね、何処のブルジョワジー的な姫様ですかと思いましたね。

だつて、あれですよ？ プールがあつたりするんですよ？ 許せません。

とりあえずあれですね、最初入つたときに色々とやりされました。例えば魔法を使つたりとか、チャチャゼロというクリングドールと戦わされたりとか、はたまた雷の暴風などを使ってみるなど無理難題を言われました、どうやら魔法の検査？ 才能検査的なものだつたらしいです。

「自分でも判つていましたが……流石にくみますよ？」

「勝手にへこんでいるがいい坊や……とは言つたものの、格闘センスはやっぱ抜けて高いと判断できる」

「あれですか？ 魔法使いを止めて、拳闘士にでもなれと言つのですか？」

嫌ですよ、絶対に嫌ですよ。

だつて“風花武装解除”を覚えてみたいじゃないですか！

あの魔法は男の夢ですね。僕は光の矢など撃てません。

できる魔法は“火よ灯れ”と、戦いの歌と、風櫃、意識をシンクロさせて、自分の記憶を相手に体験させることができる魔法、夢や幻想空間を覗くことができる魔法ですかね？ 夢や幻想空間を覗く魔法を覚えるのに一年かかりましたよ。あと記憶にシンクロ……3年かかりましたが、なにか問題でも？

ついでに何で覚えているかというと僕の趣味です。記憶とかそんなの覚えてたら面白そうじゃないですか！

「拳闘士、いや魔法剣士になれ……坊やの場合は魔法拳士か？ どちらでもかまわんのだがな」

「なれつて強制！ 嫌です！」

「強制だ！ 何度も言うが坊やには魔法使いとしての才能はない、遠距離からの火力重視である魔法使いタイプは無理だ。が、坊やは近距離重視の魔法剣士辺りが似合っている……だがまあ、私が師となるからには、魔法を覚えてもらひたい」

「という訳で勝手に決められましたね。なんですかこれ？ 僕泣いちゃいますよ？」

「そう言えば、今日から休みらしいです。なんでも三年生になるまで休みらしいです。あれですか、春休み的なあれですか？」

とりあえず良く分かりませんが、一週間近く休みがあるよつです。

休み＝修行＝死亡＝フラグ……判ります！

「という訳で、この一週間……いや別荘だから何ヶ月か？まあ、そんのはどうでもいい、坊や、貴様を強くしてやるつー。」

「という訳で、僕の地獄な日々が始まりました」

「何をブツブツ言つてるんだ？」

「氣のせいです。エヴァンジェリンさん」

という訳で修行風景に行ってみよつー

レッシ……アミとリーゼの写真集100万円で売つてあります。

修行風景的ななにか 気合だ頑張れ地獄の筋トレ

「なにをやつている坊や！ まだ300回程度だぞ！ あとスクワット1000回だ！」

「いやいやいや、無理ですって、これ以上無理です！」

「戦いの歌を使ってズルしているのだからまだ大丈夫だろつー。」「

なんという無茶苦茶なことを言つてくれやがります。

戦いの歌を使つていたとしても身体能力の強化だけです。まだ数えて10歳の僕にはスタミナなんてないんですから

くつ、このエヴァンジエリン・ロ・リ・マクダウェルめー！
と、心の中で罵倒します。

「誰が……ヒヴァンジヒリン・ロ・リ・マクダヴェルだああああああああ！」

「僕の心を覗かないでくださいああああああああああああつっ！」

腹をおもいつきり蹴られました。

あれです、回し蹴りを鳩尾にモロ入りました。

その上アレです。後ろに吹っ飛んでますね。非常にやばいですと
いうより、息が出来ないです。

ドンガラガツシャーンと壁に激突した上にめり込んでしまってま
す。

少し氣を失いそう……です……わよ……なら……

「この程度で氣絶するなああああ！」

「グホオ！」

腹を蹴られて強制的に目を覚ましたが……何か問題でもあ
ります？ 僕にしたらありまくります（泣）

修行風景的ななにか2 チヤチヤゼロは僕のトラウマ

「ハハハハハハ！ モット避ケナイト死ヌゾ？」

凄いです。刃物を振り回してきてるキリングドール、ハツキリ言
つて怖いです。

てか、刃物が今僕の腕を切りました！ 痛いです……泣きたいく

らこです。

骨まで達してゐるんじゃないでしょうか！　とにかく逃げましゅう。

「逃げたら修行をもつと過酷にするぞ？　茶々丸を加えるか？」

さて、チャチャゼロを倒すとしまじゅう！

しうがないぢやないですか！　エヴァンジョンの眩しが聞こえたんですよ！　鬼だ！

「イイゾイイゾ！　コレナラ樂シクナルツテモンダ！」

チャチャゼロの攻撃を頑張つて避けてこきます。

なんですかね、刃物なんて怖いです。

なんとか紙一重で避けていますが、前髪がやばいです。なんかおでこが少し見えちゃつてます……

僕の髪の毛を返してくださいあああああ！

とりあえず怒りの正義の鉄拳、中段突きを放ちますが、綺麗に避けられ体を斬りつけられました。

そこから先の記憶がありません……想像するだけで怖い。

修行風景的ななにかラスト　魔法の授業である事を覚えました。

「なんで魔法の射てを覚えさせよつとしたら瞬動を覚えるんだ！」

「一種の才能ですね！　羨ましいでしゅう！　エヴァンジョンさん！」

「ハツキリ言って羨ましくない」

「マスター……それも一種の才能といつものだと思われます」

「茶々丸……割り切るしかないか」

「酷い……だがそれがいい！」

「とりあえず、Hヴァンジエリンさんの……黒のヒモパンだと此処に記録

「……なんで魔法を覚えないんだ……私の指導の仕方が間違っているのか？ どうなんだ！」
「いや、僕にやつ当たりされてもねえ……ドンマイ！」
「……疲れた。明日の朝は修行無しだ。学校に行かないといけないからな」「……だが、帰ってきたら直ぐに修行だからな。サボるなよ？」

ふむ、Hヴァンジエリンさんは眠りたい様子です。
という訳で僕も寝るとします。

いや、別にアレですよ？ 嘉んでたりしませんよ？

「……だが、帰ってきたら直ぐに修行だからな。サボるなよ？」

「はい、僕オワタ！」

「とりあえず僕はアレですね、裏の仕事とやらをサボりまくっているので、なんて言い訳しようかと頭を悩ませました。が、しかし、リーゼとアミは本当にこれで良いのだろうかと悩みました。
なにが言いたいのか、それはアミとリーゼはただただ教師という

仕事をしているだけで、本当にリーゼとアリは立派な魔法使いにされるのか……それを悩んでいるのです。

ただ教師をして立派な魔法使いになれるほど甘くはありません……そうエヴァンジエリンさんの修行を耐えていたときに思ったことです。

いつエヴァンジエリンさん級の敵が現れるか判りません……想像するだけで泣きそうです。

第一に教師をすることで立派な魔法使いになれるという事が変です。

とりあえず今は、アミとリーゼには実戦経験が欲しいことになります。早急すぎるかもせんが、なんとかなるでしょう。

「……エヴァンジエリンさんを喰けるか、責任は全て僕が持つということでいいでしょう。明日相談しましょうか」

僕の血を飲んでいるので人を襲つたりはしないでしうが、またリーゼとアリに嫌われますね……悲しいことですが覚悟をしちまいます。

とりあえず修行地なのに修行の修の字もしていないリーゼとアリを叱るべきか迷うところですね……今は田舎でクンパンクでした。

ネギ・スプリングフィールドの日記3より

「一歩アリマリが心配です（後書き）

作者「色々と頑張りうねー 展開が速いのは……まあ色々ほのぼのの
しどくのがめんどいからです！」

ネギ「色々つてなに！ とりあえず感想をお待ちしております」

妹が可愛い……と思こます 前編（前書き）

やひこ 息抜きー

妹が可愛い……と思います 前編

という訳で今日エヴァンジエリンさんが、学校から帰ってきたので相談しました。

相談したらなにやら難しい顔をして椅子に座り込み紅茶を飲み始めます。

「なんで私がそんなことを……いや、交換条件で血を吸う量を増やすが……それでもいいか?」

「大丈夫です、命の危険がなければいいです。それに、これは全て僕の責任していいです。立派な魔法使いにならなくても父親は探せますしね」

「ふむ、意外と覚悟はあるのか……ジジイからは許可を貰ったのか?」

「いえ……許可は貰えました。とても渋っていました。が、一応アレです、妹達は色んな人から期待されていますからね。僕と違つてね……だから経験を積ませたいんですね」

ふむ、と頷きながらエヴァンジエリンさんは、なにやら楽しそうに口を緩めました。

なにやら少しブツブツいいながらログハウスの地下に降りていきました。

ハッキリ言つてなにせら怖いです。

数分ぐらいしてからでしょうか、なにやら茶色いロープを持ってきました。

「これを着ろ」

持つてこるロープを投げつけてきました。

だいたい予想はできましたが、とりあえず言つとおりロープを着ます。

少しだけでかいですが、なんとか着れました。

「よく似合つてゐな……茶々丸」

「なにか御用でしようかマスター？」

指をエヴァンジエリンさんが鳴らすと、茶々丸さんが何処からともなく現れました。

これは一種の手品なのでしょうか？

「これを坊やの手に」

「了解しました」

なにやら丸っこいリングを茶々丸さんに渡しています。

茶々丸さんが近づいてきて僕の手を取りました。

ちょっと冷たいですが気持ちよいですね。

「坊や、茶々丸につけてもらつているものは魔法発動体といつものでな？ あの小さな練習用の杖がなくても魔法が使えるようになるものだ」

少し嬉しい感じがします。初めてプレゼントされましたからね。

「坊や、貴様もアミヒとコーヘをモチロン襲うんだらうな？」

なるほどなるほど試しているんですね。

モチロン襲いますよ。というよりエヴァンジエリンさんが嫌だと言つたら、僕一人だけでやるつもりでしたからね。

「襲います。妹達の為ですからね……妹達は、このよつた事を望んでないでしょがね。また嫌われますね」

「坊やは本当に妹中心だな？ だが、そこを氣に入ってるぞ、私はな」

なかなか嬉しい事を言つてくれます。

僕夕確かに妹中心です。妹達が将来幸せになればそれでいいのです。まあ、今の妹達の幸せを壊そうとしている僕が思うのも変かもしれませんがね。

ですが、本当に申し訳ない感じがしてなりません。エヴァンジエリンさんに……。

口には出しませんがエヴァンジエリンさんは手伝つてくれないと思つてました。

なにやらエヴァンジエリンさんは学園内でも微妙な立場です。もし間違えれば魔法先生達から凄い反発が来ると思います。

まあ、そこを何とかして僕の責任にするのが勝負どころなのですがね。最悪オゴジョの刑は覚悟しています。逃げますがね。

「エヴァンジエリンさんにそつと言つていただけると嬉しく思いますよ」

「つはー、言つてろ馬鹿弟子が……それで坊や、何時頃に決行するんだ？」

テレ隠しですね判ります。

「大停電になる前……そうですね、2週間前ぐらいから騒ぎを起すとしましょう。今から約1週間後ですかね？」

エヴァンジエリンさんは、領いてそのまま地下に行きました。多分別荘に行くのでしょうか、僕も着いていきます。

やつぱり別荘に入つていきましたが、なにやら茶々丸さんが僕の田の前に立ちふさがります。

「すいませんがネギ先生、今日の修行は行なわない、とのことです。なにやら別荘を大幅に増築するとか言つておりました」

なるほどなるほど、なにやら嫌な予感がしますが、とりあえず僕は地下から地上へ上がつてこきます。

「どうあえず、リーゼとアミの様子でも見できましょり……学園広域指導員もこなすとしましょうか」

やつぱりリーゼとアミの補佐なんとしてないよね。

「明日菜姉様はやつぱり力強い」

Hグアンジヨリンさんの家から出でて30分ほど、田標のリーゼとアミを発見しました。

なにやらダビデ広場と呼ばれる場所にいましたよ。予想以上に広かつたので焦りました……迷子的な意味で。

「明日菜は力だけが取柄だからじゃないのかしら?」

なにやらリーゼとアミは明日菜といつツインテールをしてくる女性の事を褒めてこます。

少しアミは褒めてこるのが微妙なラインですが……。

「アアアアアアニイイイイイー。」の口せ悪こ口かしらあああ。」

なにやら明日菜という女性は力が強く、アミヒワーゼに慕われているようですね。なにやらアミの口を引つ張っています。可愛いですね。

しかし、妬ましくなつてきました。

「……少し妬ましいですね」

妹達は僕の前では必ずと言つていいくほど、あのよつた態度はしません。ただただ辛く悲しい言葉ばかり言います。

ね。けど、僕の前でも少しごらり、あの半分、いやほんの少しでもいいから……まったくもって妬ましいし羨ましい。

「ん、あの子、なんか「チラ見てる」

「おひいきの畠田菜という女性に会つた。

僕はこれにて退散するとしてまじめ

僕は後ろを振り向き歩いていきます。

「ちよつと、なに男子が女子学の所をうわいわしてゐるのよ。」

どうやら退散できなくなりました。

はあ、やういえば男子禁制の女子学でした……なにやら視線があるなあと思つてましたが、まさかの女子学……やつちやつたなあ。とりあえず、まだ顔を見られてないから、逃げるチャンスはあり

ますね。

そう思つていたらなにやら頭を捕まれました。

「えつ」

なにかパリンッという音が響きました。

凄く不味くなりました。明日菜といつ女性もその音を聞いたのか、吃驚しています。

ええ、自分で判ります、幻術が解かれました。

一体なにが起きたんですか。

「アンタ、ちょっとこいつを向きなさい！」

強引に振り向かされました。

なんとかして火傷の跡を見せまいと両手で隠そうとしますが、ダメです、隠す前におもいつきり見られました。

「アツ……！」めん

幸い妹達は明日菜といつ女性の後ろにいたのでバレませんでした
が、早く逃げないとけません。

妹達も明日菜といつ女性に何があつたのか聞こいつとしています。
好機ですね！

「それでは……失礼します」

どうやら妹達にバレるかもしれません。

失礼します、なんて言つて逃げるんじゃないなあ、声でバレたかも……そんなことを思いながら僕はその場を後にしました。

「ネギ兄様？」

「兄さん？」

リーゼとアリの声が聞こえたのは氣のせいだと思いたいです。どうか明日菜という女性が火傷の事を言わないでくれることを願います。

「……ツツ……ハアアアア」

深呼吸をしましよう、息を整えましょう。
走ったときに幻術を施しましたが、大丈夫なのか心配です。
まあ、今の僕には確認する事ができません……とりあえず、ちゃんと出来ている事を望みます。

「いつたい……なにが起きたのでしょうか

触られた瞬間に僕の幻術が解かれました。
あれは魔法を無効化したと言えるのでしょうか？
これは、少し不味いですね。

「チツ……苛立つきました」

これは本当にどうしましょうか。
とりあえずどうしましょうかね、なにやらだんだんと暗くなつてしましましたし、そろそろ学園広域指導員の裏でもしましょうかね。

なんか表の喧嘩の鎮圧とかしてないよね、そんな事を思つたりしたら負けです。

ネギ・スプリングフィールドの日記4-1より

妹が可愛い……と思こます 前編（後編も）

作者「あれです、アスナの魔法無効化はやせりし過ぎの物、まあ、つついまないでください」

ネギ「まあ、」

妹が可愛い…………と思こます 後編（前書き）

注意……高音を少し強い設定です。

そのようなものが苦手な方は見ないよひごしてください。

妹が可愛い……と思います 後編

システム、それは全ての兄にさせられた難題。

盗撮、それは全てにおいて犯罪的な匂いがする行為。

スーパー・スター・コンプレックス、僕の事ですね判ります。

そう、これはアブノーマルを目指す僕の物語であった！

「とか考えてたら夜ですよ……夜ですよー！」

一応僕の服装は茶色ローブの下に白と黒をベースにした服を着ています。

まあテンションが高くみえましょうが、実はめちゃ低いですね。

苛立ちとか苛立ちとか苛立ちとか、色々あるものです。

僕としてはこれから学園広域指導員としての仕事をしよう!と思いまます

とは言つたものの基本的に誰かと一緒に組んでる感じなのです

が……とりあえず合流地点に行ってみましょう。

とかなんとか思つていましたが、止めました。

「めんどくさいですね……基本的に僕は一人で行動するのが大好きな孤高の狼なのです」

という訳で合流地点などに行きません。

だってめんどくさいのです。

今日はエヴァンジエリンさんの家に帰りました。
エヴァンジエリン家に出発です。

「そこのネギ先生……合流地点とは正反対の道を進んでいませんか？」

と思つたらややこしい人がきましたよ。

むちむちで腰までかかる金髪、そして黒い服を好んできている人です。

まあ、それは“*黒衣の夜想曲*”を使つてゐるからでしょう。いつでも戦闘が出来るようにしてゐるのは凄いことです。魔力切れが心配ですがね。

「高音さんが……また僕のパートナーですか？」

そう彼女は高音・D・グッドマンという美しい女性です。1回しかやつてない裏の仕事のパートナー……まあ、裏の仕事と言つても見回りで、前回は何もなく安全に終了しました。

しかし彼女の胸は僕の中では神です。やっぱり神様はオッパイといつ至高の芸術品を作つてくださっていますね。僕は感謝しています。

「そうですよネギ先生？ よくもまあ、この一週間……サボつてくれましたわね？ あなたは教員という自覚が足りません！ 判つているのですか！ そこに正座なさい！」

言つとおりに正座して座ります……石が痛いです。

しかし会つて早々と説教をしてくれる高音さんに惚れそうです。口答えすると煩いので説教を黙つて聞きますよ。僕にとつて説教の時間は至福の時です。

何故ならばオッパイが揺れているからですよ。怒つてゐるときの動作が凄いですからね！

「判りましたか！」

「はい！ 心を入れ替えて頑張りたいと思います！」

ほとんど悶えていたので聞いていませんが聞いたふりをしどきましょう。

また怒られるとき悶えれますからね。
わたくし、とつあえずちやんとじょひと思します。

「では、ネギ先生、行きましょ。生徒達に平和を守るために…」
「はい、生徒達の平和を守るため」「元気

でな感じで高音さんが先導して歩いてこりますのうついてこります
しょひ。

僕は一応紳士を自称しているのでオッパイ以外は見ないようになります……別にチラッと高音さんの下半身を見たりしません。
本当ですよー。

そんなこんなを考えていたら結構時間が経っていました。
そして今は橋にいます。

なにやら不穏な気配がします。

これを殺氣でしょうか？ 高音さんは氣づいてないみたいですが、
僕は違います。あのキングドール……チャチャゼロとエヴァンジ
エリンさんの殺氣を浴びまくっていたので意外と敏感です。別に肌
が敏感って事じゃないですよ？

「高音さん……ストップです。前方100m辺りに5匹の妖怪がい
ます、犬の形をした妖怪です」

「……」

視力を強化して見ます。

大型の妖怪が5匹、なにやら速そうです。ちょっと肉とか削げ落ちたりしますから怖いです。

高音さんは黒衣の夜想曲ノクトウルナ・ニグレーディニスを出します。

実は途中で魔力切れになり元の服装に戻りました。とりあえずどうするか考えましょう

「高音さんって遠距離できますか?」

「可もなく不可もなくです」

なるほど、という訳で高音さんは遠距離で魔法を使つてもうりいましょう。

僕は近距離戦をします。

やはり落ちこぼれと一緒に戦い方が限られてしまいますから困りますよね。

「僕が前衛をします。高音さんは後衛を、とはいっても僕は前衛しかできないので、必然的に高音さんが後衛になるのですがね、とりあえず、初のパートナー戦です、頑張りましょ」

「ひらひらこそ、ではネギ先生、お互い頑張りましょ」……では、合図を

「了解です……」

5匹の妖怪がコチラに向かって走ってきています。
意外と速そうです。

「3……2……1」

距離が40mをきりました。
では、始めましょ。う。
修行の成果を出すときです！

「……0-！」
「エウオカーテイオヨウムルキナリルムグロアドアーツアーグネント
風精召喚剣を執る戦友迎え撃て！」

高音さんの呪文が完成したら戦いの歌をして瞬動で一気に距離を詰めます。

距離は約10mほどに縮まりました。
高音さんの姿をした風の精靈が一気に5匹の妖怪に襲い掛かります。

1匹は風の精靈のおかげで地面に倒れましたが、まだ健在な4匹。倒れた1匹はダメージが深そうですが油断は禁物です。

「……………！」
「少し……怖いですね」

妖怪達は先程の魔法で散らばってしましましたが、別に対処できないと呪うわけはありません。
また瞬動で距離を詰めます。
今度は距離は0です。

「では、成仏してください！」

橋の端っこに移動した1匹の妖怪の腹をアップ一気味に1発殴ります。

結果、拳は妖怪の腹を貫通、血が手につきます。妖怪は悲鳴をあげて転がりピクリとも動かなくなりました。

感触が気持ち悪いですが文句を言つている暇はありません。

「ハラカーティオカミキサアリルムグリードヤドアント
風精召喚 剣を執る戦友捕まえ！」

高音さんの魔法が散らばつた残りの3匹を捕りえようと疾走しますが、1匹だけ逃れました。先ずは捕まつてない1匹を殺す事に専念するしかありません。また瞬動でその1匹に移動します。橋の真ん中とは意外と決闘精神でもあるのでしょうか？　とうあえず感激します。

「決闘を好んでるなんて感激です……ね！」

体重を乗せた回し蹴りが炸裂しましたが、いかんせん隙がありましたので、華麗に避けられました。

「！」

「せめて言葉が判るように喋つてください！」

こんな軽口を叩いてますが意外と焦っています。案の定、隙だらけの僕に噛み付いてきました。まあ、そこは腕を噛ませるのですがね。

「ツツー！」

痛くて堪りませんが、チャチャゼロさん達につかられている傷よりも浅いので何とかなります、。

「痛いんですよおおー！」

そのまま腕を上下に振り妖怪を叩きつけます。

叩き付けた反動で大きく妖怪は跳ね上がりますが、ビリヤリ追いで討ちをしなくてもよい感じです。

「影よー！」
ウノブリハ

複数の影が浮き上がった妖怪に突き刺さります。

これはグロいです。

この妖怪は絶命。

後は残りまだ捕まっている2体です、まだ最初の1匹は地に倒れているので今のところカウントしないつもりですが、一応用心に越したことはないので……

「高音さん！ 倒れている1匹と捕縛されている1匹を御願いします！」

「任せましたわ！ ネギ先生！」

高音さんは高速で詠唱で呪文を唱え始めます。とても頼もしいです。

それでは僕は捕まっているもう1匹の妖怪を瞬動で近づき、拳で打ち下ろし頭を叩き割ります。

高音さんも呪文の詠唱が終わり妖怪達を倒しました。

安心したせいか血がベットリとついてる手を見て思わず吐きそうになりました。

「……終わりましたか」

「お疲れさまです。気分はどうですか？」

高音さんがゆっくりと近づいて僕に問います。
心配してくれて嬉しいです。

しかし、めっちゃ吐きそうです。

「……気持ち悪いですね、吐きそうです」

「私も最初の時は気持ち悪くなりました。それに吐きましたわ」

堂々と自分の過去を暴露する高音さんに惚れそうです。
吐くのが普通だから我慢しなくても良いということですね。

「いえ、大丈夫です……腕の治療をお願いします
「判りましたわ……^{クラ}治癒」

とても気持ちよいです。

しかしながら、まだまだ修行不足ですね。頑張らないとダメです。

「気持ちよいですよ、高音さん」

「いえいえ、つと、後は専門の魔法使いの人にしてもらえば完璧に
治ります。それにしても」

「はい?」

「初めてにしては上出来です、良く頑張りました。ネギ先生を褒めて
あげます」

とても綺麗な笑顔で頭をクシャクシャと撫でられました。見惚れました。

なんというかネガネガさんに撫でられたような、気持ちよい感じです。

「ありがとうございます……では、後は電話して後始末を任せると

しましょ?」

「えうですね……えうですねネギ先生? 腕の治療が終わつたら御飯を一緒に食べませんか?」

「いやかに高音さんが言います。

そんなの断れるわけないじゃなしですかと言いたいですね。言葉にはしませんが……

「肉類は流石に食べたくないの……ラーメンなビビツですか?」

「いいですね、そうしましょうか。ネギ先生」

そう言つて高音さんは携帯電話を取り出して、後始末と治療が上手い魔法使いの先生を呼びました。

今日は色々と嫌な事がありましたが、高音さんの笑顔が綺麗だったので帳消しです。

追記：高音さんと一緒に食べたラーメンは美味しかつたです。

ネギ・スプリングフィールドの日記4・2より

妹が可愛い……と思います 後編（後書き）

作者「高音つて風系統の魔法使えるなら、いついう魔法も使えるんじゃね？」
と思い暴走した結果がこれだ」

ネギ「いや、まあ、あれですね、僕として助かりましたが、妖怪設定など、そのような事があるから批判は免れないかもしれませんね」
作者「覚悟しています……あと影よ（ウンブラー）なんですがね……」
「どういう風な魔法なのか忘れちゃつたので、想像で描[写]しました
……どうか教えてください」。影よ（ウンブラー）とはどういう魔法
なんですかあああ！」

ネギ「そこは頑張りつ……では、感想などをお待ちしております」

妹と兄と妹大全集 前編（前書き）

息抜き

展開がはやあああいから注意

「な……なんといふことだ！ 僕が大事に取つておいた妹大全集が無くなつている！ それに、リーゼとニアの写真集（パンツ編）までが！」

「ネギ先生、それでしたら、今朝、マスターが燃やしてました」「なん……だと……」

どうもネギです。

妖怪犬と戦い家に帰つてバタンキューしたネギです。
朝起きて妹大全集を見ようとしたら無くなつてました。とりあえずエヴァンジエリンさんに苦情を言いたいです。

しかし朝から僕の大切なコレクションが昨日のうちに燃やされたという事を聞いてショックです。気分はブルーですが、僕のハートもブルーです。

人生の半分を消失したような……僕つて何のために生まれてきたのでしょうか？

とりあえず、エヴァンジエリンさんが座つている机の前にいつて紅茶を入れてもらいました。もちろん茶々丸さんにですけどね。ふむ、紅茶美味しいです。

「坊や、朝から私は貴様を弟子に取つた事を後悔してしまつたぞ。なに、人生の半分を消失したなら作り直せばいいじゃない……、い

や、作らないでくれ

「人の心の声を……、僕は悲しんでいるんですよ？　あの[写真集（パンツ編）]をどれだけの歳月をかけて作ったと思つているんですか

」

「1ヶ月程度だろ？」

「……作ります！　そして1年ですよー。1年かけて作ったなんです

よー」

ああ、僕の汗と涙と嫌われの結晶が、Gubbabi。

そこのはヴァンジエリンさん、なんかこいつはもう駄目だみたいな顔をしないでください。

「……私の半径4m以内に近寄るな

「露骨に引かないでください。悲しみます」

なんか僕は悲しくなってきました。普通でしょ？　兄として妹の成長過程を記録するのが当たり前でしょ！　それに心の汗が目から出てきました。

まあ、ヴァンジエリンさんは笑いながら「冗談だと言つてくれたので、悲しみは減りましたがね。

そんな話をしていたら学校に行かなければいけない時間がやつてしまっていました。

ヴァンジエリンさんと茶々丸さんは鞄を持つて出かけようとしています。

「では坊や、留守番せず適当にぶらついているがいい。行くぞ茶々丸」

「では適当にぶらついてください、行つてまいります。ネギ先生」

僕の心の汗を華麗にスルーしてヴァンジエリンさん達は学校に

行こうとしています。

ちよつと鬼畜ですロリータです。

まあいいです。何故ならまだイギリスには僕のスペシャルなリーゼとアリの写真集が6冊ありますから。別に痛くも痒くもないもんね！

「ええ、行つてらっしゃい！」

エヴァンジエリンさんは片手を上げて返事してくれます。
茶々丸さんも茶々丸さんで、一度こちらに向き直り頭を下げてエヴァンジエリンさんの後に続いて出て行きます。

「……僕も行こっ」

とりあえず僕は、妹大全集を買いに行きます。
もちろん18禁のほうですよー。

「それじゃあ、部屋に行き準備『お兄ちゃん、兄様、お兄ちゃん、兄様、大好き、大好きだ、大好き、大好きだ』おっと、携帯が

胸ポケットに入れている携帯が鳴りはじめました。

意外とこの着信音を気に入っています。ついつい長く聴いてしまいますので危ないです。この着信音は化物か！ とても言いたいです。

そろそろ出るべきでしょうか、かれこれ1分ほど鳴っています。

「はい、じゅらネギ・スプリングフィールド改め、シス・コンリンクフィールドです。どちら様でしょうか？」

「……朝からテンション高いのおネギ君」

「どうやら学園長のようでした。

何の用事なのでしょうか？ ぐだらない理由だったら怒ります。
といつより妹大全集を買いに行くのを邪魔したのは万死に値します
よー

「まあとりあえずじゃの、昨日は良くやつてくれた。流石はネギ君
じゃのな」

「違います。シス・コンリングファイールドです」

「……さりげなく気に入ってる？」

「いえ、なんとなく言つてみただけです」

そう言つたら学園長が深い溜息をはきました。

電話越しから聞こえたので間違ひありません。

とりあえず僕は自分の部屋に行きます。もちろん携帯を片手で持
つてですよ？

「なんか疲れるぞい……それでじゃ、ネギ先生
「なんですか？ 僕はこれから妹大全集（18禁）を買いに行かな
ければならないんです。邪魔したら万死に……いえ、すでに万死に
値してます」

部屋につきクローゼットからジーパンと白のワイシャツを出しま
す。

もちろんワイシャツは胸元を開けて見せびらかしますよ？ 見ら
れるつてなんか良いじゃないですか？

「ひどい！ それより妹大全集など未成年が買うもんじゃないぞい。

……それは置いといて、ネギ君、3・Aの副担任をしてみない？」

「……妹達が担任のクラスですね？ 却下です」

用事といつから何かと思えば、とりあえず即答します。

なんでワザワザ妹達が楽しんでいる担任生活を邪魔しなければいけないんですか。まあ、壞そつとしている僕が言つても説得力ありませんが。

流石に嫌いな兄が妹達が担任をしているクラスの副担任……妹達はストレスマッハですね！

「早！ もう少し考えてくればせんかのぉ？」

「論外です、いえ、場外です、そんなのリング外にポイです。妹達は僕を嫌っているのは学園長も知つていてるでしょう？」

「確かに知つてはいるが……じゃがネギ君、仲直りしたいとは思わんか？」

説得してくる学園長がウザイです。激しくうつとうしいです。

僕はジーパンをはき終えて部屋からでます。

「仲直りしたいとは思ひません。今の状態が妹達にとってベストだからで……いや、しそうがないですね、学園長。ちょっと質問があります」

これはチャンスかもしません。

「いえ、別に副担任になつたりしませんよ？」 学園長から僕が聞きたい情報を聞き出します。

「よかうひ。ワシが答える事なり答へよう。その代わり副担任になつてくれるか？」

「学園長じだいです。それじゃあ3・Aに明日菜という女性はいませんか？」

イキナリ学園長がちょっと黙りました。

何故黙るのか分かりませんが、とにかく聞きたいので追求します。

「で、いますか？」

「……確かにいるが、どうかしたのかのぉ？」

「なんとなくです。では、もう一つだけ質問です。今のところゼとアミは誰かに魔法をバレたりしていませんか？」

また言葉に詰まりました学園長。

「」の反応から見て、3-Aの誰かにバレている可能性があると思いましたが、予測ではこの程度です、とにかく聞かなければ。

「早くしてすぐださい学園長！」のままでは妹大全集が売切れてしまいますが！

「妹大全集から離れんかい！ 明日菜ちゃんにバレとるぞー！」

なんか怒鳴られましたが別に気にしません。

それよりも、なんという事でしょうか。

とりあえず学園長に言つておきます。

「OK、流石は学園長と言つておきます、が、しかし、僕は副担任になります」

僕はログハウスが出て瞬動で妹大全集がある隠れた名店に行きました。

もちろん人がいないうな所でひつそりと建っていますから、売り切れの心配はいらないんですけどね？

「……どうしてもダメ？」

「ダメというより嫌です、妹達のストレスの権化とも言える僕が副担任になつたら……想像するだけで」

「ふう～、しょうがないのぉ、ではむづーつ用事があるんじや。聞いてくれるかの？」

学園長はしつこいです。略してしつこいわんです。
まあ、それは置いといで、ひとつひとつ妹大全集が売つてゐる店に着
きました。とても古臭いです。

「いいですか、ちょっと切りますね。10分ほどしたらかけなお
してください」

「ふむ、では10分したらかけなおすとしよう」

「ひとつ切りました。

それでは店に入ります。

店内は怪しそうな物をいっぱい売つてゐます。

小さなグリコの人形というやつから白黒テレジ、変な色をしたビ
ン、新しく出た雑誌などがいっぱいあります。

「おや、こりゃしゃい。今日は何をお求めかな?」

銀髪の若い店主が出てきました。眼鏡をかけていますが伊達眼鏡
です。この前聞きました。

商売するつもりがあるのかないのか微妙、ですがこの人が扱つて
いる商品は最高にいいものばかりです。

「妹大全集とグリコの人形……それとこの前にお願いした物を」「妹大全集かい？ また買うのかい？」

「ええ、燃やされました」

「懲りないね、その壺に腰をかけているといい、この前、君が頼んだものを持つてくるよ……しかし、君はシスコンだね。いや、通り越して犯罪者にならない」と祈るよ

案外口が悪い店主です。

僕の事を心配してくれるのはいいのですが、少し悲しいですよ。それに犯罪者になります。

壺に腰をかけてそこら辺にあるものを見てみます。
とはいってもの何か面白そうなものはありません。いえ、ありませんが、なにかやばそうな感じがしたので無視します。

「はい、持つてきたよ」

店主が持つてきたものを見て、僕の胸はときめきました。
まさか、これほど綺麗に再現されている物を店主が作れるとは思つてしまませんでしたから。

「作るのに苦労したよ……しかし、君は妹達の1／1スケール人形なんてどうするんだい？ はじめ写真を見せて作ってくれと言われたときは吃驚したが」

そう、僕が店主に頼んでいた物。それはリーゼとアミの1／1スケール人形。

僕は猛烈に感動しています！

「いえ、抱き枕にするだけです……そこ、引かない！」

店主が引いてます。

なんか引かれてばっかりです。

「ま、まあ、趣味は人それぞれだしね。えっと、全部で5690円になります」

「はい、釣りはいりません!」

かつこよく店主に1万円を出します。

店主の目が輝きました。お金に目がない店主ですこと。

妹人形を脇に抱え最速でエヴァンジェリン家のログハウスを指します。

「ありがとうございます、それじゃあまたのご来店を」

出て行くときに店主の声が聞こえましたが、返事をする暇はありません。口にグリコ人形と妹大全集が入った袋を咥えているからです。ついでに瞬動で移動中です。

あ、ついでにこの名無しの店である店主は、魔法側です。なので瞬動などしても驚かないのです。

「『お兄ちゃん、兄様、お兄ちゃん、兄様、大好き、大好きだ、大好き、大好きだ』ほふもふき!」

10分が経つたのでしょうか。

携帯が鳴っています。

とりあえずもう少しなので無視してログハウスを田舎します。

「『お兄ちゃん、兄様、お兄ちゃん、兄様、愛してます、愛してい
る、愛してます、愛している』むうー・むうむうふきー・」

着きました！

パパッとログハウスに入り、僕の部屋に移動します。妹人形をベットの上において袋もベットの上に。

「………… つはあ」

深呼吸を1回だけ。

あとは胸ポケットにある携帯を取り出します。

「お兄ちゃんも愛しています……違いました。学園長ですか？」

「何を言つておるのだ。では、用件を聞いてくれるかのお？」

ついつい着信音のお兄ちゃん大好きコールに返事をしてしまいました。

ダメですね、僕はどうも妹達が……ああ、僕の体を駆け巡る妹達の愛は日々日々増していくますよ！

「うちの孫と」

「だが断る！」

「えつ！」

切れます。

学園長の電話番号を着信拒否に設定。科学の力は素晴らしいと思ふわけです。

「………… 悪は滅びました……そろそろ行きますかね」

妹達を盗撮をしにね！

お兄ちゃんスキルは伊達じゃない！

ネギ・スプリングフィールドの日記5-1より

妹と兄と妹大全集 前編（後書き）

作者「あと3話ほどしたら本編に入りますか？」
ネギ「僕に聞かないでくださいよ……困ります」

作者「いや、まあ、展開が速いから批判が怖いw」
ネギ「だがそれがいい！ といつ訳でドM作者に代わりまして感想

をお待ちしております」

妹と兄と妹大全集 中編（前書き）

展開早いもかわらず早いので注意してください。

「いい匂いがする、盗撮は後でしようかな　だけど盗撮のほうが
……けど良い匂いだし……腹が減つては戦はできぬ、うん、食べに行こう。お金はまだまだありますしね！」

という訳で着きましたよ！

麻帆良学園中等部にね！

ですが麻帆良学園中等部に着くのに8時間かかりましたよ！　べ、
べつに良い匂いに釣られて店をあちちらこちら行つてただけなん
ですから！

ごめんなさい、迷つてました。

あつちにふらふら、こつちにふらふらとしていましたら、いつの
間にか意味不明な所にいました。何故かでかい木の所にいましたよ。
流石に吃驚しましたね。

「……既に下校の時間ですか、これは早く帰らないと駄目ですね」

着いて早々に帰るというのは僕のプライドにかかわりますが、妹
達+に見つかるわけにはいけません。

+　は魔法先生とエヴァンジロリンさん達です。

とりあえず、中等部前の入り口から出なければいけません。

「お兄ちゃんスキル発動！」

お兄ちゃんスキルとは108式まであり、今は47式のステルス
お兄ちゃんを発動しているのです。

フツフツフツフツフ……僕は今やステルス状態ですね！ まあ、
何故か故郷ではモロバレでしたが、今回は大丈夫でしょう。

「では、バレないうちに帰りまし 」

「兄さん、そこで何をしていらっしゃるのですか？」

いきなりバレました。何故バレたし！ しかもアミにバレました
よ！

「久しぶりですね、兄さん？」

挨拶してくれています。嬉しいです。

しかし相変わらず美しい！ 茶色い髪にクリッとした目、プリン
と柔らかそうな唇！

神は天と地とを創造されたと言いますが、これはまさに神が与えた
究極の美！ ああ僕のエンゲル係数……エンゲル係数は意味はあ
りませんが、とてもBeautifulです！ 数えて10歳な
に11歳ぐらいの少女に見えますよ！

とにかく動搖せず返事をしないと駄目です！

「Long time no see」

「……」

ミスりました。ありがとうございます。

動搖を隠そうとしたら逆にもつと動搖してしまいましたよー！

これは、恥ずかしすぎる所以逃げるが勝ちです。

お別れの言葉を言えばいいのです！

「Let's meet again soon」

「落ち着いてください」

駄目でしたああああああああ！ しかも空気的に逃げれませんよ
おおおおおお！

ここは落ち着いつ落ち着いつ落ち着いつよー

ああ、妹の田の前で動搖してしまった僕はなんや……

「ええっと……僕は、その、あははははははは

「なにを動搖していらっしゃるのですか？ それよりも兄さん、どうしてこのよつなといひて？」

どうしましようか、これは危ないです。本当の事は言えません。
言つたら殺されます。

しかし無愛想です。やつぱり僕の事を嫌つてゐるのでしょうか。
あの明日菜さんという人の前では凄い笑顔でしたが、僕の前では
……。

今の嫌われ方からすると、さらに嫌われた場合は無愛想どころか、
話しかけてくれないでしょ。もしくは兄弟の縁を切られる可
能性が……。まあ、嫌われる原因をそのうち作るので、憂鬱にな
そうですよ。

とまあ、落ち着いてきたので普通に言葉を発します。

「いえ、少し学園広域指導員としての仕事をしようかと思いまして
「へえ……学園広域指導員になつているんですか？」

なにやら意外そうな顔をしています。
僕が仕事をするの珍しい事なのでしょうか？
とりあえずこの憂鬱な気分をなんとかしたいです。

「私は今から学生寮に帰るつもりです。そういうえば兄さん」「え、えっと、なにかな?」

駄目ですね僕って、なんでこんなに緊張してしまつのでしょうか。それに罪悪感がヤバイです。

「兄さんは何処に住んでいりのですか?」

「これはなんと返事をすればいいのでしょうか? これは……言へません。

もしエヴァンジエリンさんの家に住んでますなんて言つたら……エヴァンジエリンさんが魔法関係者という事が判ります。いや、リーゼとアミは、そもそもエヴァンジエリンさんが吸血鬼で賞金首という事を知つてているのでしょうか?

多分……知らないでしょうね。リーゼとアミも少しだけ天然が混じっていますからね。どうせ名前が同じですねえとか、その程度ぐらいしか思つていないのでしょう。

「ええっと、タカ……ミサのところで住まわせてもらつてます?」

とつそこに出了嘘でしたが大丈夫でしょうか。
というより、普通ならバレるような棒読みで言つてしまつたのでヤバイですね。

「どうして私に聞くのですか? それよりも、高畠先生にご迷惑をかけないよつにしてくださいね?」

普通にいけました。

人を疑う事を知らないのでしょうか? まあ、数えで10歳にな

る妹に疑う事を知つてゐる僕が変でしょうが、これは将来が心配です。

「こうより疑う事を知つてゐる僕が変なのかな？ やはり僕の精神年齢が……気にすると悲しくなつてきました。」

「兄さん、少しき」

「アミー！ なに先に帰ろうとしてるのよ！」

「アミ！ なに一人で帰ろうとしているのだ！」

なにやら聞いた事がある声が聞こえました。

ツインテールをしている女性、明日菜さんとやらです。そして妹のリーゼ。すぐアミの後ろに居ましたよ。これはやばいです。これは非常にやばいです。

アスナさんとやらには火傷をした顔を見られましたが、今の顔を見られてバレる可能性があるかもしれません……リーゼとアミには絶対にバレてはいけません。それに明日菜さんとやらがもし僕の想像通りならば、僕の幻術を消してしまつ恐れがあります。

「では、そろそろ失礼しま『ん、アンタ確か……』さようなら！」

「ちょっと兄さん！ 話がまだ終わつてしません！」

アミが怒鳴つていますが今は無視です。

「こうより明日菜さんとやらに案の定バレましたよ。火傷の跡がないのに良く判りましたねと言いたいですが、言えません。というより幻術で火傷の跡を隠していますが、幻術なしだと普通に別人のはずなのに、何故判つたし！ まあ、髪の毛の形と色で判断したのでしょうか。後、身長とかで。

全速力で走ります。走りながら小声で呪文を唱えます。

「戦いの歌つ！」
カントウスペラーハクス

「のまま何とか逃げます。

一応速さは制限して、一般的の高校生より少し速めのスピードで逃げています。判りにくければ50mを6秒辺りで走っていると思つてください。

そして戦いの歌つて便利ですね！ そのうち戦いの歌の上位を覚えたいところです。

「何で逃げるのよー 待ちなさいー！」

なにやら明日菜ちゃんとやらいの叫び声が聞こえましたが、無視します。

そして、ある程度走りました。先程の場所から1kmほど離れましたでしょ？

後ろを振り向き追いつきてないことを確認します。

「追つてきていま……したよー。」

ツインテールの明日菜ちゃんとやらが追いかけてきます。
逃げの一歩ですね！

「僕の速さは世界の記録を超えますよー 着いてこれるもんなら着いてくるがいいです！」

ちょっとスピードを上げて走ります。

「これなら大丈夫でしょう。絶対に追いつかれません。しかしアーノルドといつもじこ足音がだんだん近づいてきています。

そつと後ろを振り返りますと。

「つうかあまたあああああ！」

なにやら白い息を吐きながら僕を捕まえようとしている明日菜さんとやらが居ました。

はい、捕まりました。

それも頭をがつしりと掴まれてね！ 幻術も解けました！ それ
もアミとコーヤまで200m付近まで迫ってきてるではあります
んか！

「離してくださいー！」

「嫌よ！ なんで逃げるのよ？ 話をしたいだけなのに？」

後にしてください！

とにかくワーゼとアハに見られたら終わりです！

というより頭が痛いです強く握りすぎです。握力コリコリ並ですか！

「とにかく離して下さい！ 離して。 離せよ。 マジで！」

やいの山の山里で迷子になってしまったが、迷がすつも

りはなさそうです。幻術が間に合うか微妙です。

（レバーベル） は、結構の口をなすが、どうも、

の「そがつゝほじ」と呪文はめんじへやいです。

「明日菜姉さま！ついでにネギ兄様！」

「2人とも足が速すぎます。それより兄さん、いきなり帰るとは…怒りますよ？」

ハイ終わりました。

僕の人生終了です。確実に嫌われました。

「ネギ兄様、俯いて何をしているのですか？　早く頭を上げなさい。兄がこのようでは私達が恥ずかしくなります」

アミの苛立ちの声とともに肩を捕まれました。

「ネギ兄様、アミの指示に早く従つてくれ。スプリングフィールドの一族である長兄が俯きながら独り言を駄々とほ、言語道断だ」

リーゼまで苛立つていますね。僕は泣きそうです。というより涙が少しだけ出ました。もう呪文を唱えれませんので、唇を噛み締めるばかりません。

リーゼとアミは雪の日の事件以来、スプリングフィールドの血に誇りを持つていますからね。このような不出来の兄が許せないのでしょう。他にも理由はありますけどね。

ああ、あれもこれも全ては父さん……いや、僕のせいか、いけません、全て父親のせいにしかけてました。

しかし僕はリーゼ達のために生まれてこなかつたほうがよかつたのかなあ。

兄として妹達の役に立ちたいですが、とても悲しいです。

「兄さん、いい加減にしてく

「リーゼニアミー、言いすぎよー」この子に用事があるから先に帰つてー！」

原因を作った張本人である明日菜さんとやらが言つてくれました。いえ、良く考えれば原因を作ったのは僕でした。夜以外はもう麻帆良学園中等部には近寄らないようになります。しかし意外と優しいのですね、この明日菜さんとやらは？

「しかし明日菜。私も兄さんに用事があるので」

「そうだ、明日菜姉様。私もネギ兄様に言いたい事がある」

やつぱり反論しますよね。

申し訳ありません。思考がネガティブ方面に……。

「駄目よー。貴方達の言葉は酷く辛辣だわ。少し冷静になりなさい」

やつぱりと明日菜さんとやらがいきなり手を掴んで走り出しました。

僕は吃驚しましたが俯きながら大人しく着いていきます。

後ろのほうでリーゼとアミがなにやら怒鳴っていましたが、僕にはどうするにも出来ませんでした。

ネギ・スプリングフィールドの日記5・2より

妹と兄と妹大全集 中編（後書き）

作者「頑張る」

ネギ「どうしたの？」

作者「無茶苦茶すぎ」

ネギ「把握」

妹と兄と妹大全集 後編（前書き）

ちょっと更新スピードはやいかな?
明日菜ファンにはキツイ?

テンショングリーフが下がりに下がっている僕は手を引かれるまま着いて
いきました。

火傷の跡を隠す氣力さえもありません。

ですが、なんというかですね、リーゼ達にちょっとと言われただ
けで、こんなにも精神的にきついなんて思いもしませんでしたよ。
僕のハートはガラスのハートなんですかね？
仲直りがしたいですよ本当にね。ですが無理ですからねえ。
やっぱり原因は雪の日の事件、あの時、僕が……。

「そんな所でボーッとしてないでこっちに来なさいよ」

明日菜さんといつ人の声が聞こえました。

どうやら目的地に着いたらしいです。

僕はボーッとしていたらしく、自分が立ち止まっている事にさえ
気がつかなかつたようです。

少しだけ周りを見渡します。どうやらとてもデカイ木があります。

「辛氣臭い顔をしないで、こっちに来なさい」

「このでかい木の根っこ？　というのでしょつかね？」

そこに明日菜さんが座っています。

とりあえず手招きされているので、明日菜さんといつ人の隣に座
ります。

なんというか、少しだけ落ち着いてきます。明日菜さんといつ人
は何か不思議な人です。

「よしよし、私の名前は神楽坂明日菜、明日菜でいいわよ、よろしくね？」えーっと

「ネギです。ネギ・スプリングファイールドと言います。ネギでいいので、こちらこちらよろしくお願いします」

フルネームは神楽坂明日菜というのですか。

明日菜さんとお呼びいたしましょう。

しかし、なにやらネカネ姉さんに似ていますね、リーゼ達が懐く理由が判ります。

「それで、ネギ、いくつか聞きたい事があるのだけど、いいかな？」

「はい、お答えできる事ならお答えします」

まあ何を聞いてくるのは予想はできます。

十中八九ですが、妹達と仲が悪いのか、その仲が悪くなつた理由でしううか？　あと火傷の傷の事とかかな？

「どうしてリーゼとアミと仲が悪いの？」

「僕は妹達を愛していますが、アミとリーゼはどうも違つようです。なんというか、バベルのタワーが崩壊するぐらい嫌われていますね……」

嫌われているのでしょうか、悪ければ憎まれているみたいな感じなのかなあ？

「例えが全然判らないわよ

「明智光秀が謀反を起こして織田信長を討ち取るぐらい嫌われています」

「判りやすすぎて困るわね

明日菜さんは今の発言で少し汗をたらしてます。

「今まで判るなんてね、意外と頭は良い？　まあ、僕よりは良いでしょ」

「そこまで仲が悪いのか……ふむふむ、それじゃあ、どうして仲が悪いの？　理由は判る？」

「色々と理由がありすぎて困りますが……一応確認を取りますが、明日菜さんは魔法に関わっていますね？」

そう言つたら向やら驚いた顔をしていますが、そんな事はどうでも良いのです。

「もしかして、知つてたの？」

「ええ、リーゼとアミがミスつてしまいバラしたと、そう話には聞いています」

「そ……そつなんだ」

なんか落ち込んでいます。どうも彼女はこちら側に足を突っ込んだことを再確認しているのですね！　と僕は判断します。

「まあ、今は別に魔法に関わっているとかどうとか意味無いんですけどね？」

「別に良かつたのかい！」

スパークと頭を叩かれました。

力が余り入つていないので全然痛くないですがね。

「それで、理由を聞いてみたいんだけど、あ、別に答えにくいなら言わなくていいからね？」

「はは、お優しいですね、まあ、なんとか、そのまゝ、すいませんが言えません。妹達に聞いてください、僕に言ひ資格はありませんので……リーゼとアミなら明日菜さんが頼めば見せてくれますよ、記憶を」

「……ごめんなさい その、魔法って何でもありますね」

「何でもじゃないんですけど、多少の事なら何でもできますよ」

明日菜さん黙りました。

なんというか僕は最低ですね。

ですが、これでリーゼ達に頼れるパートナーができる可能性が出てくるのです。

リーゼ達には頼れるパートナーが必要です。明日菜さんには悪いですが、どつぶりといちじり側につかってもらっています。リーゼ達の将来と幸せのためです。

多分ですが、明日菜さんが聞けばリーゼ達は多少嫌がるかもしませんが記憶を見せるでしょう。それぐらい信頼していると思います。

リーゼ達の記憶を見てもらい、そして引けないとこ今まで行ってもらいます。

少しだけ話して明日菜さんの性格は大体判つてきましたが、明日菜さんは必ずリーゼ達をほつておけないはずです。早く言えばお人よしなのです。

だから、本当にごめんなさい。声に出せません。これもリーゼ達のためなんです。

僕は妹のためなら悪魔に魂を渡したつていよいのですよ。もしも地獄という所が本當にあるのだとしたら、その地獄に僕は落ちるでしょうね。

とりあえず、僕は場を盛り上げるため、話題を振ります。

「それで、なんの話でしたつけ？ 僕がガラパン派かブリーフ派か

の討論でしたつけ？ 僕はガラパン派です

「……そんな話してないわよ！」

「違いましたつけ？ ああ、思い出しました。タカミチはズボンの下にパンツを穿いているか穿いていないかという論議でしたね」

「えっ！ 高畠先生つてパンツ穿いてないの！ って違うわよ！ なんか疲れてくるわね！ それじゃあ最後、その火傷の跡はどうやってついたの？」

どうやら話が進みそうです。

火傷の跡ですか…… そうですね。此処は眞面目に書いておきましょう。

「妹達を守るためについた勲章ですかね？」

まんま正直に言いました。

「Jの火傷の跡は雪の日の事件の時に妹達を守つてできた跡なのですよ。

左のおでこから左頬の近くまでビッシリと、とても醜いものです。実際にですね、左目はほとんど見えていません。魔法のお陰で少しだけ、ほんの少しだけ見える程度です。ついでにエヴァンジョンリンさんは火傷の事を知っていますよ？

「ねえ、ならどうして妹達に黙つているの？」

「妹達がいらぬ罪悪感を持つかもしれませんからね、言つたら言つたで仲直りできそうですが、僕はそのような事で仲直りを望んでいません」

「そりなんだ…… その、『めん』

謝られたつて困ります。といつわか謝らないでください。罪悪感がやばいですから。

胃が痛くなつてきましたよ。

「いえ、それより明日菜さん」

「えつと、なに?」

何せらとしても罪悪感でいっぱいです私つていつ顔をしています。

「そろそろ僕は帰りますので、火傷の事は黙つてくださいね?」

「も、もちろん黙つとくわよ!」

「そうですか、なら僕もですね、今日は明日菜さんが熊パンだとう事は秘密にしておきますね」

そう言つた瞬間、明日菜さんは目をパチクリとさせた後、怒りはじめましたので、僕は逃げる事にします。

はてさて、明日菜さんのお陰でテンションが戻つてくれたのではっしゃけます。

それでは明日菜さん、今度は月が輝く夜に会いましょう。

ネギ・スプリングフィールドの日記5・3より

妹と兄と妹大全集 後編（後書き）

作者「ちょっと更新スピード速いかな？」

ネギ「どうなんでしょう？ それよりも妹つていいよね！」

作者「いいよね……」

ネギ「では、感想をお待ちしております」

外伝 魔法発動体を改造してみた（まじで外伝です……小ネタかも）

「どうして……エヴァンジエリンさん……どうしてなんですかっ！」
「なにを言つているんだ？」

「どうして……どうして妹人形を……そして妹大全集をまた燃やしあんですかあああああああああつー」

「……それを田業田得」

鬱です。じゃないですね。ネギです。

どうも今日起きたら妹大全集と妹人形が燃やされていました。3日間の間抱きまくつっていましたのに。酷いです。

やはリイタズラでグリロ人形（小）をエヴァンジエリンさんの部屋に飾るもんじゃないですね。多分これが理由で燃やしたんでしょうね。

まあ、そんなこんなで妹達を襲う田になりました。

ついでに僕は今、別荘の中に居ます。アレですよ、エヴァンジエリンさんが別荘を増築を完了させたんですね。

そして城の中に居るのですが、いいですね、まるで王様気分ですよ？

「そういえば、坊や」

僕の田の前で食事をしているエヴァンジエリンさんが僕に問います。

といつ訳で、僕は僕なりの考え方をしましょ。う。

「なんですか？ キティちゃん？」

なにか黒いものが横切ったと思つたら、魔法の矢でした……何か問題でも？

余裕ぶつてますがオシッコちびりそうですよ？

ついでにキティというのは、とある人から教えていただきました。なにやらクウォナル・サンダースという方でしたが、なかなかの妹道を歩かれています。本人は妹はいませんと言つてましたが、良くあそこまで妹道を歩けられたものです。

クウォナル・サンダースという方は、あの古い店にたびたび来たりしていますのですよ。

「いえ、冗談です……なんですかマスター師匠？」

そうそう、最近ですがエヴァンジエリンさんから、マスター師匠と呼ぶようになに厳命されました。

なんでも師と弟子という関係がなんとかかんとか言つてましたが、無視していたので忘れました。

「言葉を選ぶんだな、……それでだ、とてもさつきから気になつていたんだが、その首輪はなんだ？ 何故首輪をつけてくる？」

エヴァンジエリンさんが僕の首元を指します。
なるほど、『これ』が気になつっていたということですか。

「これは……魔法発動体です」
「はっ？」

やつぱり固まりましたか。

僕がつけている首輪、なにやら囚人がしそうな鉄製で10k以上はある首輪です。

そしてこれは魔法発動体。

「私があげた魔法発動体は？」

「えっ？ セツキエヴァンジェリンさんが指を指したじゃないですか？」

「……指輪だつたはずだが？」

「うむ、もつともな質問ですね。

これができた理由……それはですね。

「魔法発動体の指輪つて溶けるかなって試してみたら

「ほうほう、それで？」

「溶けたんで、ちょっと手を加えたら首輪になっちゃいま
した……師匠お願いだからね、落ち着いてください。マジでご
めんなさい、許してください、お願いします。もうじませんから元
に戻しますから！」

エヴァンジェリンさん止めてください。

なんですかそれ、エクスキューショナーソードですよね！ お願
いします許してくださいよ！

エクスキューショナーソードを首筋にあてないで！ 死ぬから死
ぬからあああああ！

別荘で4日間のあいだ磔の刑に処されました……。
磔中にステーキを目の前で食べられたのがムカつきました。

ネギ・スプリングフィールドの日記外伝より

外伝 魔法発動体を改造してみた（まじで外伝です……小ネタかも）（後書き）

作者「ふうー」

ネギ「磔されている人間の目の前で焼肉しないでください」

作者「うめえー」

ネギ「死んでください」

作者「ついでに首輪はアレです……うたわれにごてぐるカルラの首輪です……次回の本編から魔法発動体は指輪ではなく首輪になるので注意を」

襲うはずが仲間はずれだった……そして新たな道へ！（展開速いけど気にしない）

さてやつてまいりました！

あと1時間……あと1時間でござります！ 茶々丸さんが言つた
は後1時間で此処を妹達 + 明日菜さんが通るようです。

テンションが上がってきた！

そしてフフフフフ……僕は判りました。判りましたよ！ 重要
なので2回です！

なにが判ったかと言いますと、僕がパソコンであるということを
！ 漢字にすれば妹魂です！

そうです、僕はパソコンという事を認識して、また妹達への「〇
×度が、愛しています大好きです度が上がったという事ですよ！
そう、それは僕のピュアな愛が昇華して、新たな領域へ行つたん
ですよ！

「なに悟りを開こうとしているんだ……戻つてこい、坊や」「
「いえいえ、ただ僕は妹達への気持ちを昇華しているのですよ、え
え、べつに悟りは開いていませんよ」

「微妙に開いてる、微妙に開いてるだろ」

ふふふ妹達をこれから襲おうと思うのですが、あれですね、妹達
が涙目で地に這い蹲つている姿を想像するだけで……そう、めつち
や興奮しますが、これも愛なのです！

そういうえば僕は今ですね、エヴァンジエリンさんと桜通りで待ち
伏せ中です。ついでに僕は顔を隠しています。仮面でね！ だつて、
明日菜さんも襲うんだもん！ 幻術を無効化されて、妹達に火傷を
知られるわけにはいきませんからね！
あ、無効化するかも知れないということは、エヴァンジエリンさ
んにも話していますよ！

とりあえず僕はエヴァンジエリンさんにパッチーンってな感じで
ワインクしちゃいます。

「……坊や、1回だけ死んでくれ」

なにか、コイツはもう駄目だ、明日の朝になつたらお前は豚肉になつてゐるんだね、まるで養豚場の豚を見るような冷たい目ですが

ツノデノ!

僕のワインクでデレたのをツンで隠しているつもりなのでしょう
……これは実に美味しい！

「死んでくれ……なるほど、それは僕への愛と受け取つてもよろしいんですね！ はつはつはつは、そうですかそうですか、僕の妹になりたいと！ ふふふふふ良いですね！ 良いですね！ 死んでくれ＝妹になり僕に愛でてくれと、そして可愛がつてくれという事、ああ、僕はなんて妹思いなんだ！ どうですか、エヴァ、僕の妹になつた感想は！」

「いや、本当に死んでくれ、といつもこのトンションは止める。
気持ちが悪い！」

いやはや無理でござりますよ、このテンションはあれです。システムですから仕方がないことなんですよ！ それについてもウザいとか思つてそうな顔をしています！ 僕はそれが見たかつたんですよ

！ 心の中でガツツポーズ！

ヒガーンジヒリンせんの額に青筋とやらが浮かんできていますが、別に気にしません！

「よし、私が許そう、死ね！」

「せりせりせり、トレヤですねー

「！」

少しだけやばそうな雰囲気！ とにかく頭を右にチラチラとすりします。

すると、轟！ といつ風を切る音と共に何かが僕の頬を掠めていきました。

あれ、おかしいな？ 仮面を被っているのに頬から血が出てるよ……。

「ちつ……次は外さんぞ。私が許可するまで頭を動かすな」

これはこれは、とてもお怒りのようです。

ふふふ、だがその顔もまた美しい！ ですが命の危イイ機イイ！

「まつまつまつ！ 調子に乗つてました……本当に止めんなぞ！」

妹達を襲うついで少しテンションが上がりすぎました。いや、襲う事にはちょっと抵抗がありますけども、しょうがない事です。

普通ならテンションが下がるでしょうが、僕の場合は上がるのです。まあ、ポジティブシンキングとやらですね！ あ、何をするんですかエヴァンジェリンさん！ 手を首に！

首が絞まる！ 首が絞まるから！

「坊や、襲うからと言つてだな、無理やりテンション上げるのせどうかと思つた？」

僕の首を絞めながら「ヤカに言わないでください！」
死ぬう、マジで死んじゃ……っ……。

「意識を失ったか？ まあいいか、襲い終わるまで寝とけ。今回は
私だけでいい」

といつ声を聞きながら意識を手放しました。

「おはよう、坊や。襲い終わったぞ？」
「おはよひざりこます」

どうやら僕は氣絶していたようです。とこりより展開の速さに頭
が追いつきません、とりあえずわかつたことは襲い終わっていると
いふことだけ。

ああ、それだけ判れば問題ないでしょー。 ふつ、流石はエヴァ
ンジョンさん、やりますね！ しかも起きたら別荘でした！ え
つと、城の中ですかね？ 内装的に。

周りを一度見てみると、シャンテリニアビッシュしかありません
……うん、ここは城の中にある僕の部屋ですね。

「いや、せーません。襲おうとした僕が……恥ずかしいかぎ
りです」

「いや、なに、坊や、貴様は良く役立ってくれたぞ、恥じる必要は
ない」

なにやら嫌な不穏な、僕にしたら最悪な事をしでかされた感じが
します。

といつも今氣づいたんですけど、頬が痛いです。仮面が微妙に

割れています。それと幻術も！

「……えっと、なにかしたんですか？」

「少し盾になつてもらつた。魔力を封印されていると改めて実感しましたよ」

「どうやつて盾にしたんですか？ 気を失つてたはずなんですが？」

「それはだ……フフフフフ、ドールマスター人形使いである私が、人間を操れないなんて事はない」

凄く良い笑顔で言されました。

これは悲しむべきなのでしょうか？ それとも役に立つことを喜ぶべきなのでしょうか？

「……なんか僕の扱い酷くないですか？」

「気のせいだと思うぞ？ それより私は腹が減つたぞ、茶々丸」

エヴァンジエリンさんが指を鳴らしたら、今まで居なかつた茶々丸さんがいきなり現れました。

なんという瞬間移動！

「マスター。すでに用意はできております」

「さすがは私の従者だ。坊やの分も用意しているだろうな？」

「マスターがそう言つと思って、ちゃんと用意しています。それで
はこひらには

という訳で城の中にある食堂に僕とエヴァンジエリンさんと茶々丸さんは向かいました。

何回見ても城の中の食堂は無駄に豪勢です。

なんですかね、この無駄に長いテーブルと無駄に一杯ある蠅燭、そしてシレツと部屋の隅つこにある荒縄と蠅燭とムチ……なにに使

うんだ！ めっちゃ気になります！

「では、やあらりお座りください、ネギ先生」

と言われ茶々丸さんが言つた席に座ります。
気になりますが……頑張つて気にしないようにこじましょー！

「……おお、これはまた豪勢ですね」

田の前にはステーキに寿司、そしてあつあつしてそうなサラダ。
そしてジャパニーズお刺身！
なんといふか、美味そつ！

「はい、今日は豪勢にしてみました。マスターのお金ではないので
……それでは私はこれで」

茶々丸さんがそう言つてくれました。そして一瞬でどこかに消え
ました……なにそれ怖い。

それは置いといて、Hグランジエリンさんのお金じゃないからで
すか。納得ですね！

「それでどうでしたか？ リーゼとアミは？ あと明日菜さんは？」

「……神楽坂明日菜は少しだけ及第点だな、頬を6発殴られたぞ……
坊やが」

僕かよ……ヒツツコミをいれたいですが話をちゃんと聞きます。
頬が痛いのはそのせいですか。

あ、このステーキ美味しい。

「リーゼとアミは私の予想通り……魔法は撃つが、全て教科書通り

のよひなものだった

なるほどなるほど。

あ、師匠、僕のおかずを奪わないでください！

「良いと思ったところは、対応が早かったところだな

僕の大事な誇れる妹ですから当然でしょう。

しかし、良いところについては、駄目なところもあるのでしょうか。まあ、当然でしょうね。駄目なところは大体予想できますがね。しかし、荒縄とムチが目に入つて……

「駄目だと思ったところは……坊や判るか？」

「……あ、それは正体がエヴァンジエルンさんだと判つたら魔法を撃つのを止めた……正解じゃないでしょうか？」

リーゼとアミは優しいので自分の生徒だと判ると魔法を撃つてこないだろ？と予想しています。

何故判っているかつて？ 僕がお兄ちゃんだからですよー。

「流石は兄だな、それぐらい予想できただといふ感じか？ それでだ……坊や、アミとリーゼは何の魔法を使える？」

「えつとですね。2人とも同じ属性が使えて、同じ魔法を覚えていきます。今覚えているのが風櫛^{デフレクション・ブリエ・ウエルチメテス・エリヤー・モランス・エクサルマティオ}、風花旋風^{フレクシオ・ブランス・バリエ・ウエルチメテス・エリヤー・モランス・エクス}、風障壁^{ウエルチメテス・エリヤー・モランス・エクス}、風陣結界^{ウエルチメテス・エリヤー・モランス・エクス}、風花武^{フルグラティオ・アルビカンス}装解除、光と風と雷の魔法の矢、風精召喚系統、あとは、白き雷戦闘用だとそれが全てですね。我が記録に偽りなし！」

「はいはい、それで、それらの魔法は学校で習うのか？」

学校で習おうもの……だつたはずです。

つる覚えですね、記憶力が余りない僕は妹達の“保険”で卒業さ

せられたようなものなのだから。

「まあ、つい覚えですけど魔法学校で習います」

「そうか、もう少し自主的に色々な魔法を覚えてそうだと思つたんだが……しかしあれだな、坊やは戦カントウスいの歌を習得しているが、やはり自力で習得したのか？」

「そうですね……5年前ほどから練習し始めて、去年の春ぐらいに習得しましたね……僕の周りはリーゼとアミばかりに期待していたので、落ちこぼれである僕には全然で、自力で習得するのには骨が折れましたよ」

そう、去年の春ぐらいに僕は戦いの歌を習得しました。全てリーゼとアミに期待がね、僕は落ちこぼれでしたから、あまり先生方に相手にされませんでした。とうよりあまりじゃなく相手にされてなかつたです。

落ちこぼれは、相手にしないみたいな？ まあ、不良的な扱いと思つてくれて構いません。まあ、校長は可愛がつてくれましたがね。という話は置いといて、戦いの歌つて今では簡単に出来ますが、覚える前は大変でしたよ。

戦いの歌がちゃんととかかっているのか判らないから、でかい木の上から落ちたり、湖を泳いで試してみたりと……あれはめんどうだった。

「流石は私の弟子だ。私も最初は魔法を覚えるのに苦労を……おつと、話がズレたな。ふむ、次リーゼとアミを襲う時は 坊やだけでやつてみろ」

「無茶すぎます。僕に死ねと言つのですか？ というより何故？」

「妹中心の坊やが、リーゼとアミを襲えるのか、それを見たい。あとはそうだな、坊やの力だけでリーゼとアミは倒せると思つたからだな」

なんという悪趣味な！ と言いたいところですが、まあ、今回は
なにもしていませんので、拒否権はないでしょう。
あ、『ちそつさまでした。御飯が美味かつた！

「……茶々丸さんもつけてくれません？ 明日菜さん専用で」

「……神楽坂明日菜が出てきたときだけだぞ？」

「ありがとうございます、しかしこですね、正体がバレたらどうしよ
うかな」

「べつに正体がバレたって構わん。妹達に嫌われる覚悟をしてるん
だろ？ なら見られたって良いじやないか」

確かにそうなんだけど、まあ、遅かれ早かれバレるのは確実です
からね。

少し気を引き締めないと駄目ですね。頑張ります。

「そうですね、なら、襲いつときは素顔で……それより師匠」「
どうした坊や？」

「さつきから気になっていたんですけど

「なにがあるのか？」

先程までシリアス的な話をしていたので空気が重いですが、これ
はどうしましょうか。

話をしていく気になつて仕方がないものがあります。それは、荒
縄とムチです。

本当に気になつて、本当に仕方がないものがあります。それは、荒
縄とムチです。

本当に気になつて、本当に仕方がない！ ですが言つたらなにか、
そう、僕の大切なにかを失い、新たな道を開きそうな感じがして
なりません。

チラリと荒縄とムチがあるところを見ます。そしてエヴァンジェ
リンさん……どうしよう。言えない。

「あ、いえ、なんでもないです」
「さつきからなにを見ているんだ
？」

興味があるのか

？」

僕の目線を追われエヴァンジエリンさんにバレました。
なんとか少し嬉しそうな、ニヤニヤしています。そして手が
危ない動作をしています。止めて、そんな笑顔で僕の顔を見ないで！

「いえ、全然興味ありません！」
「そうか、試してみる気はないか？」
「……全力で拒否させてもいいます！」
「そうか、残念だ……」

とても残念そうな顔をしています。言つながら捨てられた子犬の
ような顔です。

僕は絶対に騙されませんよ！

「それじゃあ見せてもらひだ？」「
期待しないでくださいね？」

期待されるプレッシャーって凄く重いから嫌です。
まあ、とりあえず別荘を出てリアルタイムの明日頑張ってみます
か！

あと、夢の中で僕が荒縄で縛られてエヴァンジエリンさんにムチ
で叩かれる夢を見た。
少しだけ新たな道を開かれた感じがしました。

とあるネギのシステム日記的ななか? 6より

轟^{クラク}のはずが仲間はずれだつた……そして新たな道へ！（展開速いナビ気にしてない）

作者「爵だ」

ネギ「バツカジヤナイノオ？」

作者「冗談さ」

ネギ「次回、妹達と兄の騒動、もしよかつたら感想……くれたらい
いなあ？ といつより、ネギまの本がなくなつてゐから判らん」

妹達と兄との昔の夢と騒動（早いから注意）

『頼む……逃げとくれい……』

気づいたら田の前で、だんだんと石化していくスタンおじいちゃんの姿があった。

またこの夢か、そう僕は思った。

『どんなことがあっても、あやつの子供を守る、それが……死んだあのバカへのワシの誓いなんじや』

もし神様が本当に居るならば酷いことをしてくれる。

どうしてこの夢を見させるのか、大体想像はつく、けど、僕はどんな事をしても、どんなに時間が流れても、忘れないとそう誓っているはずなのに……。

村が業火に覆われ、家は瓦礫の山とかし、優しかった村の人たちは燃えたか石化したか魔物に食い殺されたのか……僕には判らない。いや、判っているのは極少数の人たちだけだ。一つずつ場面が変わっていく

酒場でいつも二コ一コしてて、怒ると怖い、ユーおじちゃんは悪魔の魔法によって石化していた。

隣に住んでいた僕と同い年の友達である、ミール君は燃えて黒くこげて、最初はミール君だと判らなかつた。

少しだけ乱暴だけど、ナンパとか妹達は愛するものだと教えてくれたマーク兄ちゃんとマークお兄ちゃんの妹であるはるひちゃんは魔物に食われていた。

そして村の人たちの中で、妹達にとつて僕にとつても特別な存在であったスタンおじいちゃんは僕のせいで完璧に石化してしまつた。

僕のせいで姉さんは足を石化してなくしてしまった。

なんである時僕は、湖の前でじつとしていなかつたのかと、この夢を見るたびに後悔してしまいます。

じつとしたら姉さんの足が無事だつたかもしれない。

そうしてらスタンおじいちゃんが僕を庇つて石化しなかつたかも

しれない。

妹達がスタンおじいちゃんが僕を庇つて石になつたところを見られなかつたかもしれない。

僕もこの火傷を負わなかつたかもしれない。

そんなエフの事ばかり、この夢の中では考むかえてしまつ。

そして、また場面が変わる。

『お前が……ネギか』

小高い丘、村を、全てを飲み込む業火が村を覆つてゐる場所が見える小高い丘。

フードをかぶつた男 父さんから姉と妹達を守るために小さな練習用の杖を顔に火傷を負つた僕が構えている。このときの僕は気づいてなかつたんだよな。

父さんがだんだんと近づいて、僕を、小さな僕を撫でてくれる。

あの時の感触は今思えば、とても気持ちよく、今にでも目の前のフードの男に抱きついて泣きたくなるような、そんな感じだった。まあ、父親というのを直感的に判つたのかもしれないのだろうけどね。

『この杖をやろう。俺の形見だ』

小さな僕に父さんは杖をくれた。けど違うんだ、僕はこんなもの

がほしいわけじゃないんだ。ただ僕は

本当に、もし夢の中で僕の体を自分で動かせるのなら、喋れるの

なら、父さんに言いたい事がある。

だけど、そろそろ終わるようだ。周りが明るくなつてきて、そして……。

「なにを眠っているのでしょうか、ネギ先生」

その一声で僕は夢から覚めた。

周りを見渡すと誰も居ませんでしたが、頭上を見ると桜の木より少し上らへんに居る茶々丸さんが見えました。
どうやら起きてくれたようです。

「あ、待ち伏せしてたら眠くなつてきちゃつて……『めんなさい』

凄く嫌な夢だつた。

なんといつか鮮烈に覚えすぎでいて気持ちが悪いです。
妹達に……我ながら悲しく夢です。

さてと、トランションを上げていきましょー。

「あと3分と17秒したら、此処をリーゼ先生達が通ります」

そういや、エヴァンジロリンさんが襲撃してから4日経つてしまつた。

そしてこきなりだけど茶々丸さんつてハイテクすぎじゃないでし

ようか？

だつて指パッチンでエヴァンジョンなんの下に直ぐに駆けつけ
るという機能 転移系の魔法ですか？ そう思いましたよ。

まあ、色々と無駄な事を言つてますが、これも暇つぶしです。

「それにしても寒いですね」

僕は今桜通りで妹達 + 明日菜さんを待ち伏せ中です。何処に隠れ
ているかって？ 桜の木の天辺らへんの木の枝です！ さつきから
ギシギシと音を立ててるので枝が折れそうですよ！ そして寒い
あれですね。フードを着ていますので顔をほんの少し隠せれます。
あと首輪がやっぱり重い！ 魔法発動体を外したい！ フードの下
にはTシャツとジーパン……軽装です。

「この襲撃が終えれば、家に暖かいスープを作つてあげますので、
もうしばりご辛抱ください」

「それは、楽しみですね……あ、リーゼ達が来ました。それでは、
出て行きますので、明日菜さんが邪魔してたらお願ひします」

「了解しました。では、この武運をお祈りしています」

「カントウスベラーラクス
戦いの歌」

さて、リーゼ達のためです！ 嫌われようが嫌われまいが、頑張
りましょうか！

「呼ばれて飛び出でジャジャジャーン」

桜の木の上から飛び出してみました。もわろん小声ですか？
リーゼ達御一行は少し嫌な表情をします。そりゃそりでしうね
……。

フードで頭を隠しているの大丈夫だと思いたいですが、少し怖い。

「あんた……この間の　エヴァちゃんの盾！」

明日菜さんの発言にコケかけました。

まあ、明日菜さん達の印象だとそうでしょうな。
氣絶していたので判りませんが、エヴァンジエリンさんが盾として使った僕を明日菜さんが6発ほど殴ったと言つてましたよね。

「私の名前はアミ・スプリングフィールド！　あなたの名前は！」

おひおひ、こきなりアミが自己紹介し始めましたよ。
これは怖い！　というより何で自己紹介をするんですか！　しかし、これは答えないと妹魂に傷が……しかし、本名を名乗るわけにはいきません、偽名を使いますか！

「僕の……僕の名前は」

少しだけ焦ります。とこうより裏声にしているのでめんたい。
そして偽名を使いますか！　と心の中で強く思つても、肝心の偽名がねえ……どうしよう。

うーん。1回だけ学園長に使つたあの名前を言こまじゅうか、少しだけ改変してですがね！

「僕の名前は、シス・ワーリングです。お見知りおきを！」

胸をはつておもいつきついであります！ そのとき頭が軽くなりましたが知りません！ ジジは最強にかつてよく言わなければならなかつたので！

「…………あんたネ』おつと、あそこにはFOTOがー。ちよ、あな『私の名前はシス・コンングですー』いや、さすがに無理があるわよ」

流石は明日菜さん、一発で判りましたかー。ジジ明日菜さん呆れない！

それにしても、なにせじりリーリーゼヒアリも呆れているのですけど、何故でしじう？

「兄さん……何をしているのですか？」

「ネギ兄様……兄妹として恥ずかしいぞ？」

「なあー！」

な……何故バレたし！

声も完璧に裏声のはずなのに、なんでだ！

くつ、流石は妹達、たつた1回見ただけで僕だと判るとほ、ちい、僕の妹達は化物か！

「なんで判ったんだ！ 完璧に顔を隠してるにー！」

「…………ネギ兄様が偽名を名乗つたときフードが脱げたんだ」

「まさか、ちつ、やるなー 妹達よー！」

まさか僕が偽名を名乗つたときに魔法で脱がすとは……恐るべしー。

「いや、勝手に脱げたわよ、ネギ」

僕の心の声が判つてこるかのよつて、明日菜さんが説明してくれやがりましたよ！

明日菜さん、丁寧な説明ありがとうござります。

まさか最初からバレるとは予想外です。

少し茶々丸さんがいる場所を見ます。

なんですか茶々丸さん、その呆れた表情は、とても馬鹿にされている感じがします。

「それで兄さん、これは何の冗談ですか？ 怒りますよ？」

アミは少し怒っているようだ。

「ああ、うん、これはあれです、秘密です！」

「ふざけないでいただきたい、ネギ兄様、本当の事を言つてくれ」

リーゼ、そういうながら身構えるのはいいですけどね、人払いの結界を張つてないので……まあ、どうちでもいいです。

というよりエヴァンジロリンさんは正体が判つたら魔法を撃つてこなかつたと言つてしまましたが、僕の場合では多分ですけど違つようです。

「ネギ」

明日菜さん、そのまるで、そう、あれです、姉のよつな卑く言つてみたらって顔は止めてください。

なんというか、とても言つたくなりますので。

「とにかく秘密です 秘密が聞きたいならば、やつですね、僕に勝つたら教えてあげますよ」

「……では『駄目、兄妹で争いなんて駄目よ』明日菜姉様……しか

し

「しかしもだつてもないの、兄妹なんだから、まあほひやんと話しあいなれこよ、ね？」

あら、これは、リーゼ、引き下がるのですか、どうしましか、いらんといひで邪魔が入りましたね……ここから心攻めタイムに入らうかと思つたのですがね。

ふむ、やれやれ、茶々丸さんに頼んでみましようか。

「茶々丸さん、お願ひできますか？」

「これだけで茶々丸さんに判るはずです。
本当にすいませんね。茶々丸さん。

「え、ネギ、なに言ひ 茶々丸わつー」

「了解しました、ネギ先生……すいませんが明日菜さん、私の相手をお願いします」

茶々丸さんが降り立ち、無防備の明日菜さんに突つ込みリーゼとアミから引き離します。

さて、最初はアミとリーゼを精神的にボロボロにしてですね、その後戦います……リーゼとアミが泣いたら終了ですけどね。

ネギ・スプリングフィールドの日記7

妹達と兄との昔の夢と騒動（早いから注意）（後書き）

作者「息抜きタイム」

ネギ「他の小説って詰まつてますからね」

作者「そういうことね」

ネギ「胃が心配です」

僕つて独善者かな……

「人生はホーヤララララアである」

「どういう意味よ？」

「意味なんてないですよ、明日菜さん」

「ないんかい！」

突然の事でリーゼとアミは固まりましたが、直ぐに頭が働いたのか、激怒した表情で僕を睨んできます。

なんというか、リーゼの前髪越しからの田つきが怖いぐらいにキリッと僕に向けてきます。

アミも同様に、くりっとした田が怖いぐらい上がっています。

「ネギ兄様！」

「兄さん！」

アミとリーゼは僕に切れてる時は良く判りやすいのですよ。

絶対に最初、『兄さん』『ネギ兄様』とだけ言うのです。

他の罵倒などは本気で怒っていない証拠です。

ポイントは兄さんと兄様の辺りが震えてる感じですかね？ 怒っているときのポイントです！

ですので完璧にブツツンしています。が、直ぐに元の調子に戻つてもういます。

「怒つても、冷静になることです。スプリングフィールドの血筋がこの程度で頭に血が上るなど、恥を知りなさい、ほら、深呼吸を

してくださこ……」

「うーん、少しだけアリとコーヒーは冷静になつてくれました。スプリンングフィールドといつもをだせば一発で冷静になります。まあ、ブツツンさせた僕が言つのもあれですがね。

しかし、スプリンングフィールドという言葉を使うのは、とても嫌です。ウエールズの周りにいた魔法先生達みたいだから。しかし、2人とも素直に深く深呼吸して落ち着いてますね。

「通り冷静になつてくれたので、こつからは質問タイム一心を責める前に質問タイムです。

「さて、それでは質問です……アリとコーヒー、日本、いや、麻帆良学園に来て、魔法の修行をしましたか？」

答えは判つてますけど質問してみました。してないでしょうね兄妹でしかわからないぐらい、ほんの少しだけ動搖しています。それと、質問している時の態度ですが、凄く怒っていますという感じで声を出しています。

「……なんで答えないといけないんだ。ネギ兄様が秘密にしているのに、もしもネギ兄様の秘密を教えてくれるならば、答えてあげてもいいぞ?」

動搖しています。といつよりビクつとしています。

流石は僕ですね。お兄ちゃんは怒っていますオーラが出ているんですね！

ふふつ、アリとコーヒーは怒られた事があんまりありませんでしょ
うからね、効果は抜群なのですよ。

といつ訳で、少しずつ言つていきますか。

「 判りました。なんのために修行にきたんだかね」

少しだけですがアミとリーゼの雰囲気が変わってきましたよ。
なんというか、そう、言葉に表すのならば、子犬です！ 泣きそ
うな感じの子犬ですね！

やばい、テンションが上がってきたよ！

おっと、自重自重です。

「ちつ、呆れてなにも言えませんね、アミにリーゼ……スプリング
フィールドならばです、自主的でも修行の一つや二つやっていなけ
ればいけないというのに……それでも僕の自慢の妹ですか？」

僕が舌打ちをした瞬間、アミとリーゼの肩がピクリと動きました。
予想通りですね。

しかし、なんですかね、テンションが上ると同時にですね、僕
の纖細かつピュアなガラスのハートが傷ついていくのは気のせいで
しょうか？

というよりスプリングフィールドを使っての質問って嫌ですね。

「兄さん、その、一体なにが言いたいのですか？」

少しだけですが、声を震わせて聞いてきます。

ああ、アミは泣きそうですね。リーゼも少し涙目になっています。
今の状況から推測するに、兄に初めて怒られているような感覚？
そのような感じなのでしょうかね？ ふふ、姉にも周囲の人にも怒
られたことはないのだから……。

おっと、冷静に冷静になら。

「それは後で答えてあげます、では、もう一つ、アミにリーゼ、こ

の答えは判りきっていますけども聞いておきます、ただ仕事を、教師という修行をして立派な魔法使いになれると思つてているのですか？」

これ重要です。

アミとリーゼの事ですから、教師をすればいい、それだけで立派な魔法使いになれると思つているのでしょうかね。

だから優等生は……と思つてしまつたのは秘密。

とりあえずそれは、ズバリ言つて甘いです。

ティラミスにハチミツと餡子をつけるぐらい甘いです。

裏の仕事、早く言えば僕がやつてある仕事ですが、もしも、リーゼとアミがやれば直ぐに死ぬだろうと、エヴァンジヨリンさんが言つてました。

何でもエヴァンジヨリンさん曰くですね、精神　心が弱いかららしいですね。

心が強くないと駄目だとか、僕の心はアミとリーゼよりも弱いはずなんですかねえ？

ガラスのハートなのに何故でしょ？

それにしても、リーゼとアミが裏の仕事ができるようになるまでに何年かかるか判つたもんじゃありません。

それまでに、リーゼとアミが魔法を忘れてしまつてしまひつつもありませんからね。

まあ、そこいら辺は学園長がなにかしら指令でも出してなにかしらさせたりするのでしそうが……学園長の判断は遅いのです。

ちらりと僕は茶々丸さん達を見ます。

アミとリーゼの後方30m辺りでは、茶々丸さんとアスナさんが戦っています。

お互ひ一歩も譲つてないですね。

というより明日菜さん……桜通りの木をですね、素手1発でメキメキと折らないでください。怖いです。

茶々丸さんも茶々丸さんで、なんですかあれ？ 足を強く踏み込むだけで地面にあんなクッキリと足跡が残るものなのですか？ どちらもバケモノ並の筋力ですね！ 茶々丸さんは性能が凄いと言えぱいいのかな？

「それで？ どうなんですか？」

だんまりして答えてくれません。

というより、僕の考えが当たつていたようですね。

しかし 普通に反論できるような事をバンバンと言っているのに、なんでなにも言わないんでしょうか？

それにしてもあれですね、僕つて独善者ですかね？

「アミにリーゼ、僕でさえですね、とある人と師弟関係になり修行をしているというのに……そのような甘ったれた考えならば、^{ステルマギ}^{立派}な魔法使いになるものではありません」

だいたいですね、立派な魔法使いになつたら、粉争している所とかに行かなければならぬのに、教師をするだけでは駄目です。

教師だけじゃ……粉争している場所など行けるはずもございません。

せめて実戦形式の戦闘など、または実践経験が豊富な人から色々と学ぶなどしないと、粉争が起きている場所など、行く事など無理でしょう。

せめて着任して直ぐにでもですね、魔法先生の師事するべきだと思つのです。

高音さんでも師事している人がいるんですから……誰かは知りませんけどね。魔法先生の誰かでしょう。

しかし、これって9歳児が言つ言葉じやないですよね。
うん、理不尽ですよなア!!とコーザにしたらですけどね。

「さて、先程のア!!の質問ですけどもね」

この場だけ一瞬の沈黙が降ります。

なんというかこの場だけがですね、別次元にあるような感じです。
少しずつ近づいていきア!!とリーザの目の前に立ちます

「今すぐ荷物をまとめてウエールズに帰りなさい、やつ言つたたいの
です」

仕方がないことなのです。

どうか妹達よ……泣かないで。

「 ぐすつ
 ひくつ」

期待を裏切つて泣いちやいましたね。

戦闘シーン入らずして泣くとは

これは戦わずして勝つという事なのでしょうかね?

泣いたら終了にしますと思つていきましたけど……これは、まあ、
いいのでしょうか?

しかし、泣いてる姿を見ていると、とても慰めたくなつたりしま
す。

妹達の目からは止める事などできないほどの涙が流れ、地面に

シニをつくりています。

その泣く姿がとても綺麗で、僕がしている事は間違っているのか
といふ考へが一瞬だけ頭によぎりましたが、頭を横に振り否定しま
す。

とりあえず、どうしようかな。

「うわっ、じめり、じめんな、ひくっ」

流石は妹達だ。泣き方がシンクロしている……。
はてさて、兄としては慰めたいところですが……。これは明日菜さ
んに任せましょうか。

兄なので慰め方などは色々ありますが、泣かせた本人が慰めると
いうのはねえ。

それに。

まあいいや、茶々丸さんと明日菜さんはまだ戦っています。
茶々丸に合図を出すため指で音を鳴らします。

ひつ、中指と親指でね。

「茶々丸さーん！ 家に帰りますよー！」
「了解しました。少々お待ちください」

指を鳴らした瞬間、茶々丸さんの動きは凄いものでした。
右手で殴りかかっている明日菜さんの手を掴み、一瞬にして投げ
ました。

なんというか、明日菜さんが1回転して地面に倒されました。
日本の武術である、合氣道といふものなのでしょうか？ いや柔
術なのかな？ そこら辺は判りませんがとても凄いです。

明日菜さんはとても苦悶の表情ですね。

まあ、僕の何回も投げられたりしてますから、あの痛さは判りま

す。

息ができないことにあの背中にこぐる痛む……。

「明日菜さん大丈夫でしょうか？」すいませんが、今日はこれにて失礼します」

そう言つて茶々丸さんは僕のところに近づいてきました。何故か僕の顔と妹達の顔をジーツと見つめて茶々丸さんがとある事を言つてくれました。

「戦わずして勝つてしまったという訳ですか」

なんともまあ状況把握があることでしょう。それはそれで嬉しいのですけどね。

「ネギ先生、リーゼ先生達をこのままにしておくつもりなのでしょうか？　流石にリーゼ先生達に厳しそぎではないでしょうか？」

などと言つてくれました。

いや、僕だつて慰めたいんですけどね？　僕が慰めたら意味無いじゃないですか。

「大丈夫ですよ、明日菜さんが慰めてくれます」

「そうですか……ですがもう少し優しくするところは駄目でしょうか？」

なにやら茶々丸さんが僕を説得しようと色々と言つています。

どうしてそんな事を言つのでしょうか？

僕にどうしろと？

妹達の将来の幸せのために、妹達が望む未来を実現させるために、

妹達の願いのために、それが僕が望んでいる事です。そのためには、今は耐えてもらうしかないのです。

もしも、妹達が立派な魔法使いを止めるとこ^{マギスティル・マギ}うならば、僕はその選択を支持するでしょう。

妹達が将来安全に暮らせるならば僕にとって願っても無いことです。

妹達は父親みたいな……憧れ、そして英雄みたいな立派な魔法使いになると願っているのです。

ならばこれぐらいの事なんぞ耐えなければいけません。全ては妹達のため……間違つてない、と思いたいですよね。

「僕は間違つていなばずですよね……帰りましょう」

僕はこれ以上は喋りたくありませんので、妹達に背を向けて、そのまま歩き出します。

茶々丸さんも諦めたのか黙つてついてきます。まったくもつて胃に穴ができそうですね。

ああ、今日は別荘でエヴァンジエリンさん秘蔵のワインでも飲みましょうかね。

そんな事を考えながら、後ろから聞こえる妹達の泣き声をBGMにしながらその場を後にしました。

ネギ・スプリングフィールドの日記

僕つて独善者かな……（後書き）

作者「いきなりの
ネギ「削除」
作者「そしてホニヤリフ」
ネギ「どうなることやら」「ひ」
作者「感想」
ネギ「お待ちしております……」

昔の夢と波乱な現実（なんどこの速さだ……）の速さにつけていけれない。）

たゞいま午後19時ジヤスト。

いやせや鹽の衆、」苦労であつた……と意味の無ることを思いながら僕はベットの上で3週間ほど過いでいます。

人生色々と言いますが、僕の人生は波乱万丈らしいですね。あの妹達泣かしちゃつたぜ事件の日の事です。

僕は気分が優れないのでエヴァンジエリンさんが隠している秘蔵のワインをバレないように飲んだつもりだったんですけどね、どうやらバレバレのようにしてね、両足骨折と肋骨を3本ほど折れちゃつたんですよ。

しかも足は複雑骨折ですよ。信じられますか？

まったくもって酷いですね……たつたあれですよ、ロマネなんとかつてのを全部飲んだだけで……まったくもって快感に満ちるでしょう。

しかしながら別荘で3週間ほど過ごしていますが、暇なのでテレビゲームとやらをしているのですが、これはなかなか面白い。という訳で3週間、寝る間を惜しんでゲームをしているのですが、僕のオススメのジャンルが2つあります。一つ目は1-8禁アドベンチャーゲームですね。色々な意味で燃えますよね……特に下半身的な意味で！

あともう一つはあれですね、ですかね。

ふふふふ
シューイングゲームはまったくもつて難しそうです
ね。

三週間ほど続けていますが、田舎で1面のクリアでき
ないのでよ。まったくもつて困ったものです。

とまあゲームは置いといてですね。

僕はとても暇です。

エヴァンジエリンさんは学校で茶々丸さん別荘にいます。
どうしたものでしょうか？ 2ヶ月は安静にしてくださいと
茶々丸さんに言われていますからゲーム程度しかしていませんが、
いかんせん、とても暇な状況に陥っているという事なのです。
実のところ、魔法でチビチビと治してるので、もう動き回っても
良いのですけども、茶々丸さんが……頑固者ですね。

本当に暇です。

茶々丸さんは少し御飯を作つてくるそつなので呼べるわけがあり
ません。

ゲームもよろしいのですが、ちょっとヤル気が起きないんだよね。
まったくもつてシュー一ティングというのは奥深いものです。
……やっぱり暇だと眠くなってしまいますよね。

一眠りしましょうか。

おやすみなさい。

雪の日の事件が発生してから2年もすれば、僕は孤独になつてい
た。

僕が余りにも出来損ないだから。皆が全員、妹達に期待していた。
期待に応えられない僕はなにをするにも1人ぼっちで、ただ自分
が何ができるのか考え、自分に出来る魔法を覚えようとしていた。

そんな僕を皆が嘲笑っていたから。

『英雄の息子がどうしてこんな』

才能がないと駄目なの？

『英雄の娘はあんなにも優秀なのに……』の子は拾われたんじゃないのか』

僕は拾われたの？

『英雄の息子は期待できない』

期待にこたえられなくて』めんなさい。

『英雄の息子なのになんでこれができんのだ』

僕が……悪いの？ できないのが悪いの？

『はあ、まつたく……君は全然努力していないのか？ 普通ならもうできるでしょう』

僕は努力してないの？ 僕は頑張ってるのに褒めてくれないの？

僕とは違つてリーゼとアリーナは、皆が言つてる英雄としての、父さんの娘としての、期待通りの才能があつた。

だから皆にちやほやされていた。

羨ましいって言つたら嘘になるけど、それでも僕は妹達が誇らしかつた。

なんにもできない僕が唯一自慢できることだから。

デフレクシオ

一度だけ魔法学園の基礎の基礎である風櫃フウレクシオを3ヶ月間、頑張つて努力して出来るようになったと学園の教師に見せた事があった。
僕は嬉しかったから、幻術以外で魔法を覚えたから。
だけど現実は違つた、所詮は落つけられ、誰も見向きもされなかつた。

それどころか努力してないんじやないのかと注意された。
なんで悪いのか考えたけど、どうして悪いのか分からなかつた。
いや、姉さんと校長だけは、ちゃんと見ていてくれてた。
気ままずくてもお姉ちゃん。
だから頭を撫でて褒めてくれた。
それがたまらなく嬉しかつた。

こんな事がずっと続いていたけど、そんなある日、1人の男性がウェーラーズに来たんだ。

その人の名前を高畠・ト・タカミチと言つた。
なんでも日本という国からきて1ヶ月ほど滞在するらしいお姉ちゃんから聞いた。

僕に挨拶でタカミチと呼んでくれと言つてくれた。
もしかしたらだけど、此處に来て以来の友達なかもしれない。
僕の胸はとても煩いぐらいにドキドキしてた。

タカミチが来てから1週間ほどしてからか、タカミチは酷く怒つていたんだ。

そんなに怒つていたのか分からぬけど、何故か僕の顔を見て頭を撫でてくれて、いきなり僕に、僕は魔法が使えないんだと言つた。
なんでそんな事を言つたのか分からなかつた。

それからまた1週間ほどしたらタカミチが僕に滝を素手で割つて

みせた。

とても凄くとても非常識だと思えたけど、魔法もなしで滝を割るのが凄くカッコよかつた。

僕はそんなタカミチに憧れたのかもしない。

だから僕はタカミチ見たいになるにはどうすればいいのかと聞いた。

タカミチは少しだけ苦笑いしながらも、守りたいものがあればと、答えてくれた。

そして2週間ほどしてタカミチが日本に帰る日が来た。

僕と妹達にお姉ちゃん、あと学園長が駅に見送りに来ていた。

お姉ちゃんと学園長はまた来てと言いながら見送っていた。

妹達はタカミチが行くのを泣きながら見送っていた。

僕は守りたいものというのが分からなかつた。

だから出発しようとしているタカミチに最後に聞きたいことがあると言つて、僕は守りたいというものが分からぬ、タカミチは僕に好きな人はいるのかと聞いてきたから、僕は迷わず妹達とお姉ちゃんと答えた。

するとタカミチが笑いながら、好きな人がいなくなるのは嫌だろうと言つてきたから、僕はただ頷く。

そんな僕を見てタカミチは、居なくなつてほしくない人を守つてあげればいいと、それが守りたいものだと答えてくれた。

それを最後にタカミチは日本に帰つていった。

「……結構寝てた?」

僕は首を動かして枕元にあつた時計を見る。
時刻は夜の20時13分頃。
結構寝すぎである。

「…………」い懷かしい夢を見た感じがする

まつたくもつて昔の話であった。

布団から体を起して、とりあえずゲームでもしましょうか
な……んだとつ?

「なんで…………リーゼ達が此処にいるの?」

何故かすぐ近くにある椅子に座つて、なにやら集中して田を開けましたが、すぐに田を開けました。

しかも杖を持つて……なにをしていたんだろうか。謎が増えていくばかりです。

「これはなにがどうこう」とつ?

「それは私が説明してやろう」馬鹿弟子

なにやら凄く荒ててこるリーゼ達をほつておき、何処からともなく現れたHUGAアンジーリンさんが、どうしてこいつなったのかを話した。

始めた。

昔の夢と波乱な現実（なにといつ速ただ……）の速さにつれていければねー。」

作者「シッコミかむひこいやあああー。」
ネギ「駄目でかい人、早くなんとかしないと」

作者からの報告

PCが壊れてから数日経ちました。孝之伝とネギまの小説書き溜めしてたのですが……それがパーになつたから、少しテンションが上がりきらない……つとこより、まるつきり上がらないと言つたほうが正しいのかな?

一応、思い出しながら書いているのですけども、まだぜんぜん完成してないです。

……もう書置きせずに、書いたやつページと載せようかなーと思つていたします。

なので、更新が少し早まります。

もう展開とかそんなの関係なしで書いて載せますので……小説が雑になりますけども、どうかよろしくお願ひします。

お知らせ

お久しぶりです。作者のアリストリアです。
近頃お腹の調子がよろしくないのでけども、まあなんとか元気
にやっています。

いやはや本当に困ったものですよ、Hiroとパスワードを忘れてし
まうなんて本当に俺の馬鹿としか言こようがない。

それで本題なのですが、とあるネギのシスコン日記的ななに
かは更新しません。更新はしませんが、とあるネギのシスコン日記
といふタイトルで新しく書こうかと思います。
プロジェクトからやり直すということです。

消す理由は……プロジェクトとか消しちゃったみたいな？（笑）

やり直しながらプロジェクトを思い出していく感じでやりたいのです。

とまあ以上です。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7101o/>

とあるネギのシスコン日記的ななにか？

2011年11月5日11時18分発行